

506
262



始



紀記歌集講義
紀記萬葉以外の上代の歌

たむ水榎著

洛陽堂版

大正
11. 10 4
丙亥

序

紀は日本書紀の略稱であり、記は古事記の略稱である。日本書紀はまた略して日本紀とも云はれてゐる。此の書は奈良の時代、元正天皇の養老四年に、一品舍人親王ちかひのすけが敕旨を奉じて、當時の學者太安麿及び紀清人等きのよりのひとらと與に、神代から持統天皇までの歴史上の事實を撰び集めて書き記されたものである。古事記は同じく奈良の時代元明天皇の和銅五年に、太安麿が矢張り敕命を奉じて、神代から推古天皇までの歴史を書き記されたものである。年代から云へば古事記が先きに出て、日本紀が後に出来たのである。すなはち日本紀は古事記を臺本にして改修されたものである。

猶詳しく云へば、古事記は元明天皇の時、太安麿が稗田阿禮と云ふ記憶の良い老

人の談話をその儘筆記したものであるから、その文體なども當時の言語その儘である。後八年を経て、元正天皇の代になつて更に舍人親王が修史總裁となつて、太安麿、紀清人等と一緒に此の談話筆記たる古事記を原本にして、それを全部漢文體に書き改め新に改訂補輯されたものが日本書紀三十卷である。それ故に此の兩書は各夫れづの長短を有してゐる。古書記は簡單であるが、純粹の國語で書かれた素朴な傳説風の歴史であり、日本書紀の方は多少誇張修飾を施した漢文體の編年の歴史である。けれども日本紀の方でも、歌の部分は純粹の國語で記されてあるから、その點は古事記と差異はないのである。

此の兩書に載せられてある歌謠は、短歌、長歌、片歌、旋頭歌、總べて百八十三首である。皆その時代の人々の詠じたものであつて、仔細に讀み味はつて見ると、古代民族の風俗と人情とを了解することが出來、従つて日本國民たる吾々の祖先が如何なる感情を、如何なる機會に、如何に表現してゐたか、と云ふことが會得され

る。戀愛と、戦争と、歡會とは古代日本人の三大行事である。吾々の祖先が其の奔騰的な感情を抱いて如何に戀愛に悲喜したか、又劍や戟を把つて山野や丘陵や河海を跋渉して、如何に多く努力を此の國土の經營に拂つたか、或ひは又宴を張りて興を喚び、興に乗じて男女合歡の快を取り、斯くの如くして感情的な吾れ等の祖先は、事毎に諷詠の機會を作つてゐる。それ故に此の時代の詠歌を見て來ると、此の時代の人々の生活状態がよく了解され、その感情の動いた有様が分明になる。日本民族の原始的精神は如何なるものであるか、また純粹の我が國民の言語は如何なる特質を有つてゐたか、之れ等の事に對しても、當時の歌謠は最も大いなる研究資料であることは茲に絮説する迄もない。

萬葉集の歌に就いては、徳川時代より今日に至る迄多くの人々が解釋を施し評釋を與へて、或る程度まで人々に了解されたと云つてよいのであるが、萬葉集以前の歌に就ては、まだ多くの人々は注意してゐないのである。萬葉集には仁徳天皇の御代

の歌が最も古いもので、それが六首あり、次ぎに雄略天皇の御製が、一首載せられてゐるのみである。然るに、日本紀及び古事記には、それ以前それ以外の作が多数に載せられてゐる。しかして此の中には純粹に五七五七七の謂はゆる短歌の形式を取つてゐるものと、五七五五七七五の謂はゆる旋頭歌の形式を取つてゐるもの、また單に五七五だけで片歌の形式を取つてゐるもの、さらに此の片歌を前句として、之れに後世謂ふところの附句をした形式のもの、即ち後の連歌連句の形式を取つたもの、殊に最も多きを占めてゐるのは萬葉集長歌の先容となつた五七調の長歌である、之れは神代から盛んに行はれて、ずっと奈良時代の末まで及んでゐる。なほ長歌の形式のうちで、此の五七調以外七五、七六、五六、四六等變化多様の形式を取つて、その時々的心情の自然の姿態を自由に表はしてゐる事などは、最も注目すべきところである。

凡そ紀記の歌を調べて感ずることは、我が國の後世に發達した歌謠の各種の形式

の起源が、すべて此の紀記の歌の中にあることである。その第一は長歌（後の新體詩）である。第二は短歌である。第三は俳諧である。此の三つが日本和歌の三様式である。後世に至りて單に短歌の形式に據るものゝみを和歌と稱することになつたのは、自然の變遷とはいふものゝ、之れは誤つたことである。上代には和歌といふやうな事は無い。もし漢土の詩に對して和歌といふならば、ひとり短歌ばかりではない、長歌も俳諧も和歌と云はなければならぬ。その中でも俳諧であるが、俳諧の起源は遠く紀記の歌謠のなかにある。かの紀記の各處に見える片歌の唱和がそれである。紀記の歌を見て驚くべきことは、その全部が極めて通俗で——その時代的に——、その取材も從つて平易多方面であることである。此の意味に於て紀記の歌は、その當時のあらゆる人々の思想と感情とに接觸してゐたのである。之れ實に上代の歌謠の一切が、芭蕉等の所謂平俗を旨とする俳諧と、その意義を一つにするものであつて、謂ひ得べくんば、紀記の歌謠はその全部が俳諧歌であるのである。今の歌

人が俳諧俳句を輕んじ、今の文藝の一部の人々が俳諧俳句を通俗文藝など、云つて、之れを遠ざける如きは想はざるも甚しいと云はねばならない。

以上説くところの如く、紀記の歌は我が國に於ける歌謠の溯源である。歌謠の事に従ふものは必らず紀記の歌に想ひを懸けなければならぬのに、今の人の注意は萬葉までは行くが、紀記にまでは及ばない。紀記に眼の及ばないやうな萬葉研究であるから、偏屈で淺薄で、剩へ穿き違へになるのである。此の講義は勿論完璧なるものではない。殊に此の講義は紀記の歌の内面的の研究はすべて後日出づべき余の「日本短歌史論」中の「上代歌謠史論」に譲つて、爰にはたゞ大體の言葉の解釋と首々の總意にとどめたのであるから、遺憾の點が多いのであるが、しかし此の書が多少なりとも、今の世の斯の道の研究者の求めを充たすことが出来れば幸である。

大正十一年七月十五日

相州生麥の假泊にて

太田水穂

附記

此の講義は紀記兩書を通じて、歌の作られた年代順によつて排列してある。同一の歌が兩書に載せられてある場合は、一方を略して置いた。各歌謠に添へてある前書（六號字）は、紀記の本文より譯出したのである。歌を讀まるゝ際必らず眼を通され度い。之れはその歌の感動と意味とを味ふ上に極めて重要なことであるからである。

歌詞はすべて原歌詞と對照の必要があらうと思つて兩様を並記して置いたが、中には原歌詞と多少相違するところがある。それ等はすべて古人の研究を典據としてゐる。

此の講義をするに参考した書物は、橋守部の「稜威言別」「稜威道別」本居宣長の「古事記傳」飯田武卿の「日本書紀通釋」谷川士清の「日本書紀通證」契沖の「萬葉代匠記」鹿持雅澄の「萬葉集古義」加茂真淵の「日本紀和歌略註」「古事記和歌略註」荒木田久老の「日本紀歌の解」林諸島の「紀記歌集」等である。

附録「紀記萬葉以外の上代の歌」は余の妻光子が鹿持雅澄の「南京遺響」を辿つて執筆したもので、それを余が補つたものである。

以上「紀記歌集講義」並びに附録「紀記萬葉以外の上代の歌」の二篇に依りて、萬葉以前の我が國歌謠の全

部は極めて一斑ながら了解することが出来ると思ふ。而して之れは殆んど凡て古人の研究の跡を辿つたに過ぎないものである。本書に依つて益を感じらるゝ方があるならば、その感謝は凡て古人の負ふべきものである。本書出版に際して、余の舊師高島平三郎先生は、特に厚い配慮を傾けられた。爰に先生に對して深く感謝の意を表するのである。

記紀歌集講義目次

神代の歌……………十一首……………一頁

神武時代の歌（橿原宮朝）十一首……………二六

崇神時代の歌（瑞籬宮朝）五首……………四四

景行時代の歌（日代宮朝）十三首……………五〇

神功時代の歌（稚櫻宮朝）六首……………七三

應神時代の歌（明宮朝）十一首……………八五

仁徳時代の歌（高津宮朝）三十一首……………一七二

履中時代の歌（後稚櫻宮朝）三首……………一六五

允恭時代の歌（遠飛鳥宮朝）十六首……………一七一

雄略時代の歌（朝倉宮朝）二十一首……………一九八

顯宗時代の歌（八鈞宮朝）四首……………二三五

武烈時代の歌（列城宮朝）十四首……………二四二

繼體時代の歌（玉穗宮朝）四首……………二六一

欽明時代の歌（金刺宮朝）二首……………二七四

推古時代の歌（小墾田宮朝）三首……………二七七

舒明時代の歌（岡本宮朝）一首……………二八三

附 録

皇極時代の歌（後岡本宮朝）七首……………二八四

孝徳時代の歌（豊崎宮朝）三首……………二九三

齋明時代の歌（兩槻宮朝）七首……………二九九

天智時代の歌（大津宮朝）五首……………三一

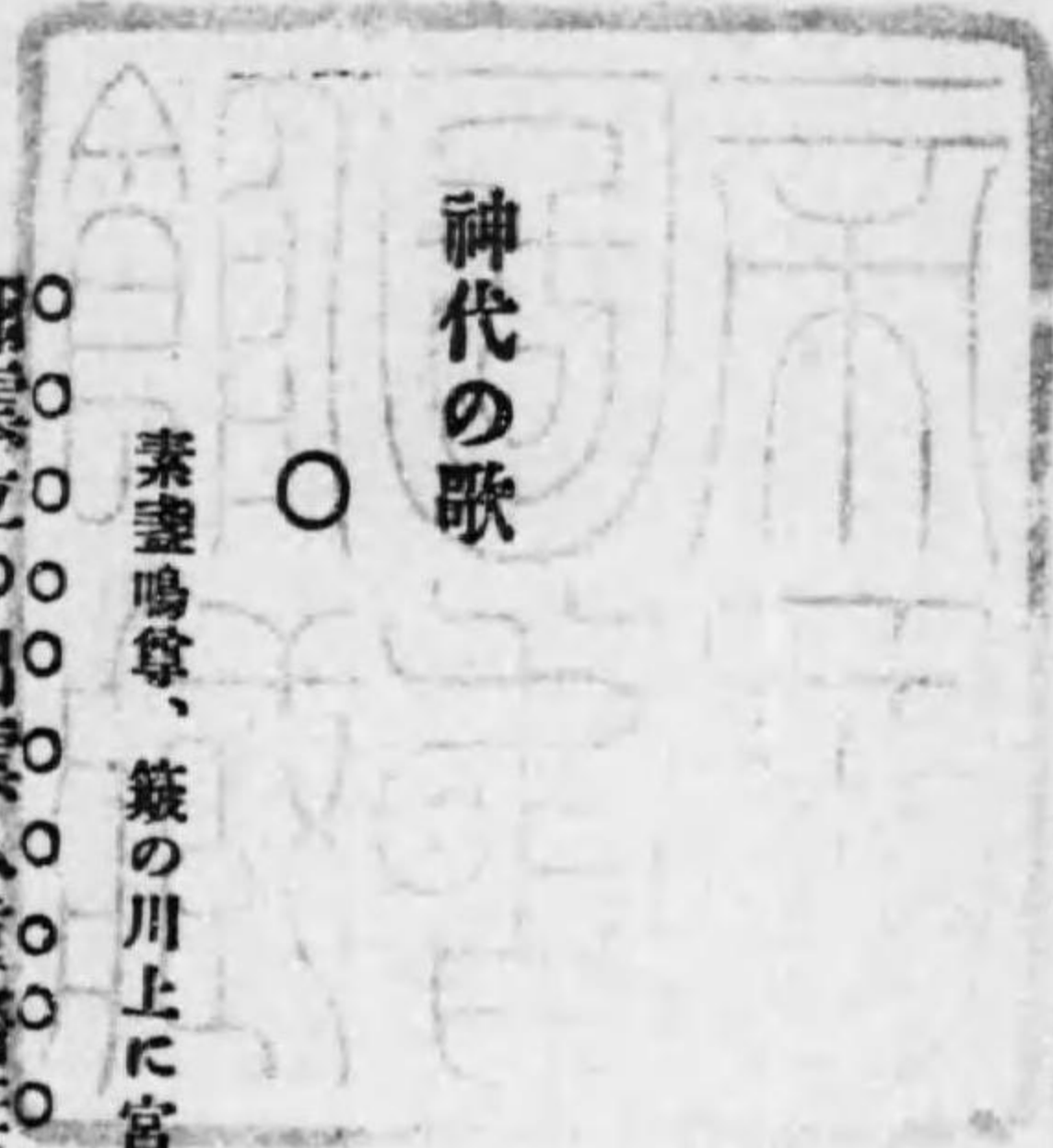
紀記萬葉以外の上代の歌

續日本紀の歌 七首……………三二一

日本後紀の歌	十三首	三二八
續日本後紀の歌	四首	三三八
三代實錄の歌	一首	三五〇
古語拾遺の歌	一首	三五一
熱田大神縁起の歌	四首	三五三
上宮聖德法王帝説の歌	四首	三五八
聖德太子傳曆の歌	二首	三六一
常陸國風土記の歌	八首	三六三
丹後國風土記の歌	五首	三六八
播磨國風土記の歌	一首	三七一

肥前國風土記の歌	一首	三七三
佛足跡碑の歌	二十首	三七四
本 <small>和</small> 月令の歌	一首	三八六
皇太神儀式朝の歌	二首	三八八

紀記歌集講義



神代の歌

素盞鳴尊、簸の川上に宮作りし給へる時の歌

彌雲立つ出雲八重墻妻ごめに八重墻つくるその八重墻を (日本紀神代)

夜句茂多菟、伊都毛夜霸餓岐、菟磨語味爾、夜霸餓枳菟俱盧、贈迺夜霸餓岐回、

此歌は素盞鳴尊が高天原より降つて、出雲の簸の河の上流に來られ、そこに須賀の宮を建てられた時歌はれたものである。尊が此の時稻田姫の爲めに大蛇の難を救

つてやつたこと、尙其の大蛇の腹から叢雲劔を獲たこと、それ等は既に知られてゐることである。斯うして尊は其の姫と共に住むべき宮を出雲の須賀と云ふ地に建てたのである。須賀は清の義で、すがすがしい意味である。○彌雲立つは雲の幾重にも群がり立つといふ意味で、彌雲立つといふのを略して云つたもの、○妻ごめには妻を籠らせん爲に……の意である。○八重墻作るは、その今作つてゐる宮殿の幾重も建て重ねた垣根と雲の幾重も立ち重なつてゐる光景とを掛けて云つたのである。

一首の意味は、妻を籠らせん爲めに、斯うして宮を作り幾重にも墻根を構へたが、そればかりでなく、雲までが八重に立ちこめて我が宮を圍んでくれてゐる。自分の建てた宮に夫婦相籠るといふのも楽しいのに、ましてあの八重垣のやうに群立つ雲の喜ばしさうなことよ……と、その新しい宮殿に姫と同棲する楽しい心持ちと、その時の四圍の光景の喜ばしさうな景色とを眺められて歌つたのである。八重墻作るその八重墻をと言葉を重ねたので切實な感情が表はれてゐる

八千矛の命越の國の沼河姫を婚ひに行幸し時、其の姫の家に到りて歌へる歌

八千矛の神の命は、八洲國妻覓ぎかねて、遠々し越の國に、賢し女をありと聞かして、美はし女をありと聞かして、さ婚ひにあり立たし、婚ひにあり通はせ、太刀が緒もいまだ解かずて、おすひをもいまだ解かねば、をためめ閉すや板戸を、おそぶらひ我が立たせれば、ひこづらひ我が立たせれば、青山に鶴は啼き、さ野つ鳥さしはどよむ、庭つ鳥鶏は鳴く、うれたくも啼くなる鳥か、この鳥も打ちやめこせね。(古事記)

夜知富許能、迦微能美許登波、夜斯麻久爾、都麻々岐迦尼豆、登富登富斯故志能久邇々、佐加志賣遠、阿理登岐迦志氏、久波志賣遠、阿理登伎許志且、佐用婆比爾、阿理多々斯、用婆比邇、阿理加用波勢、多知賀遠母、伊麻陀登加受且、淤須比遠母、伊麻陀登加泥婆、遠登賣能、那須夜伊多斗遠、

淤曾夫良比、和何多々勢禮婆、比許豆良比、和何多々勢禮婆、阿遠夜麻邇、
奴延波那伎、佐奴都登理、岐藝斯波登與牟、爾波都登理迦那波那久、宇禮
多久母、那久那留登理加、許能登理母、宇知夜米許世泥、「伊斯多布夜、阿
麻波勢豆加比、許登能加多理其登母、許遠婆」

この長歌の初の句、八千矛の神の命はといふ一句は、後世になつて此の歌を朝廷
の舞樂に歌つた時、伶人などが添へて歌つたものと見える。八千矛の神が自身詠ん
だ歌に、自身の名を云はれるのはあるべきで無いと橘守部も云つてゐる。又原本に
はこの歌の終りの「この鳥も打ちやめせね」の次へ「い慕ふや天馳使、事の語り
ごとをもこをば」といふ二聯の言葉が加はつてゐるが、この言葉は矢張り後世他人の
附加した者と思ふから、それを省いて置いた。猶云つて置くが此の八千矛の神とは、
素盞鳴尊の御子大國主神のことである。大國主神には名がいくつもあつた。○八洲
國妻覓ぎかねては、此の日本の國內に妻とすべき人を見いだし難くて……の意、

覓ぎはもとめの意で、見つけ出すこと。○さ婚ひは喚ぶを延べて喚ばひと云ひ、
なほ婚する時は互ひに喚び交はす者なる故、婚をよばひと訓ませたのである。手握
るが契るとなつたのも之れと同じ例である。○ありたし、あり通はせ、はどちら
もそこへ行つたといふ意。○太刀が緒は刀の紐、○おすひは襲ひの意で、背後から
襲ねて身を掩ひ包む被衣の如きものである。○をとめの閉すや板戸を……はその姫
の閉ざして寢てゐる閨の板戸をの義、○おそぶらひは押し振りの振りが振らひと延
び、又押ししがそと轉つたのである。板戸を明けよくと外から押し動かす意だ
○我が立たせればはおれが立つてゐると、○ひこづらひ我が立たせれば……は引き
づるを引きづらひと延べ、さらに、引きのきがこと轉化したので、板戸を引きづり
動かしてゐる有様である。さ野の鳥きしはとよむ……は雉子をききす、又きし
と今も昔も云ふ言葉である。野に棲む鳥だから斯く云つたのだ。とよむは響く意味
で雉子の啼き聲が響くやうに聞こえるからだ。○庭の鳥かけは鳴く……のかけは鶏

のことで、鶏は庭に畜はるゝものだから庭つ鳥と云つたのだ。○うれたくもは憂れたくもの意。○打ちやめこせね……は打ち惱め膺らしめよの意である。

一篇の意は、八千矛の神は此の廣い國に妻とすべき人を探しかねてゐたが、遠い越の國にすぐれた美しくしい女のあるといふことを聞いて、はるくよばひに行つた。無論氣が急いでゐるので、刀の紐も解かねば、上衣の襲ひも脱がずに、そのをとめの寝てゐる閨の戸を押したり引いたりしてそこに立つてゐた。すると戸を敲く音に驚いて山には鶴が鳴き出す、雉子がけたましく啼く、家の鶏までも鳴くのであつた。折りも折り何といふ怨めしい鳥どもであらう。あゝ此の鳥どもをうち惱め膺らせる術はないか……。と、その時の慌しいやうな焦れつたいやうな心持を歌つたのである。太古の人々の戀愛に傾けた感情の熱烈なる有様もよく表はれてゐる。のみならずその時代の風俗、ことに山や野の自然の光景も眼前に迫るがやうである。

○

其の時沼河姫未だ戸を開かずして内より答へて歌へる歌

八千矛の神の命、嫩草の女に、あれば、我が心浦洲の鳥ぞ、今こそは千鳥にあらめ、後は和鳥にあらんを、いのちはな死せたまひぞ。(古事記)

夜知富許能、迦微美許等、怒延久佐能、賣邇志阿禮婆、和何許々呂、宇良

須能登理叙、伊麻許會婆、知杼理邇阿良米、能知邇波、那杼理爾阿良牟遠

伊能知波、那志勢多麻比會。

この歌は、前の八千矛の神の歌に答へて姫が閨の中で、歌つた歌である。この初句の八千矛の神の命といふ一句は之れは前の歌と異つて姫が自身に歌つた言葉である。○嫩草はなよ草の意でなよは柔かなる意味である。こゝでは自分が弱い女であるから柔らかい若草のやうな女と云つて自分を形容したのだ。○浦洲の鳥ぞは海に棲む鳥の意。○千鳥はもと起鳥と云ふのゝたを略したので、意味は落ち着きも無く常に波に起ち舞ふ鳥であるから名附けたのである。○和鳥は千鳥の反對で和ぎた

る波に浮びゐる鳥のことである。

一篇の意は、八千矛の神の命よ、妾は若草のやうな弱い女であるから、自分の身も自分の思ふやうにはならない。で今は妾の心はさながら海邊に立迷ふあの千鳥のやうであるが、いつかは落ち着いて丁度波に浮き寝する和鳥のやうにあなたと一緒に打ち解けて添ひ寝する時のあらうものを、そんなに焦立たずに恙なく給へ……と男の心に同情しながら、又一方には自分の今の境遇を訴へて間接に男の心を取りなさうとしたのである。纏綿たる情緒の表はれた歌で、且つ何處までも男を愛しながら、一方に女のつゝましい情の見える歌である。

○

沼河姫再び續ぎて歌へる歌

青山に日が隠らば、ぬば玉の夜は出でなん、朝日の笑み榮え來て、栲綱の
白きたゝむき、あわ雪の若やる胸を、そ手抱き手抱きまながり、ま玉手玉

手さし纏き、股長に寝はなさんを、あやにな戀ひきこし、八千矛の神の命

(古事記)

阿遠夜麻邇、比賀迦久良婆、奴婆多麻能、用波伊傳那牟、阿佐比能、惠美
佐迦延岐豆、多久豆怒能、斯路岐多陀牟岐、阿和由岐能、和加夜流牟泥遠、
曾陀多岐、多々岐麻那賀理、麻多麻傳、多麻傳佐斯麻岐、毛々那賀爾、伊
波那佐牟遠、阿夜爾那古斐岐許志、夜知富許能、迦微能美許登、

これは姫が前の歌を以て男の心をとりにして見たが、まだ心残りがあつたので、
繼いで歌つたのである。○ぬば玉の夜はいでなん……のぬば玉は夜の枕詞である。
夜になつたらば戸を明けて出て行つて逢はうとの意。○朝日の笑み榮え來て……は
朝日の如く華やかな笑顔を以ての意。○栲綱の白きたゝむき……は栲の木皮にて
繕りたる綱の如く白い腕にての意。○沫雪の若やる胸を……は、沫雪の如く若く柔
らかな胸をといふこと。○そ手抱き手抱きまながり……の、そは素膚のすと同じく

物を隔てず直接に接するやうな時に使ふ言葉である。手抱きは手で抱擁すること。まながりは交がりにて手で抱いて交はること、○ま玉手玉手さし纏き……のまも玉も手の美しくさを賞めた言葉、手を差しかはし互ひに纏らすこと。股長に寝はなさん……は脚をさし伸べてゆつくりと寝ようものを、○あやにな戀ひきこし……のあやには感嘆詞で嗚乎あなやなどと同じ意味である。な戀ひきこしは勿戀聞しの意であらそんなに戀ひしたまふなどの意味である。

一篇の意は、青々としたあの山へ夕日が隠れて夜になつたらば、此の戸を明けて御目に懸からう。その時は今宵の恨みはすつかり忘れて、あの朝日のやうな華やかな笑顔を作り、あの白い腕に妾の此の雪のやうな柔かい胸を抱き交はし、その手と此の手とを纏はらせ、脚さし延べて寛やかに寝ようものを、まあそんなに執こく云ひ寄りたまふな……と重ねて男を慰めた歌である。斯うして此の明くる晩、姫は遂に、八千矛の神の願ひを入れられたのである。之れも形容と譬喩の秀ぐれた作である。

る。幾分露骨の點もあるが、上代の言葉の品位と雅馴とはその露骨を美しく詩化してゐる。凡て之れ等の歌に表はれた古代言語の靈妙な美はしさは感嘆に余りある。

○

八千矛の神の嫡后を須勢理姫と云ひけり。此の姫甚く嫉妬したまひければ八千矛の神おびしく思ひて出雲の國より大和の國に出で立たんとし、片御手は御馬の鞍に繫け、片御足は御鏡に踏み入れ給ひて歌へる歌、

ねば玉の黒き御服を。まつぶさにとりよそひ、沖つ鳥胸見るとき、袖手揚も之れはふさはず。邊つ浪そに脱ぎ棄て。鳩鳥の青き御服をまつぶさにとりよそひ、沖つ鳥胸見るとき、袖手揚もこもふさはず。邊つ浪そに脱ぎ棄て、山縣に覓ぎし茜春き、染め木が汁に染めごろもを、まつぶさにとりよそひ、沖つ鳥胸見るとき、袖手揚もこしよろし。いとこやの妹のみこと、群

鳥のわが群れ往なば、ひけ鳥のわが引け往なば、泣かじとは汝は云ふとも、
山戸の一本すいき、頸傾ぶし汝が泣かさまく、浅雨のさ霧に立たんぞ、若
草の妻の命（古事記）

奴婆多麻能、久路岐美祁斯遠、麻都夫佐爾、登理與曾比於岐都登理、牟那
美流登岐、波多々藝母、許禮婆布佐波受、幣都那美、曾邇奴岐宇且、蘇邇
杼理能、阿遠岐美祁斯遠、麻都夫佐邇、登理與曾比、於岐都登理、牟那美
流登岐、波多々藝母、許母布佐波受、幣都那美、曾邇奴棄宇且、夜麻賀多
爾、麻岐斯阿加泥都岐、曾米紀賀斯流邇、斯米許呂母遠、麻都夫佐邇、登
理與曾比、於岐都登理、牟那美流登岐、波多々藝母、許斯與呂志、伊刀古
夜能、伊毛能美許等、牟良登理能、和賀牟禮伊那婆、比氣登理能、和賀比
氣伊那婆、那迦士登波、那波伊布登母、夜麻登能、比登母登須々岐、宇那
加夫斯、那賀那加佐麻久、阿佐阿米能、佐疑理邇多々牟叙、和加久佐能、

都麻能、美許登、「許登能加多理其登母許遠婆」

之れは八千矛の神（大國主神）がその妻須勢理姫の嫉妬するのに辟易して、大和へ
逃かれ行かうとして歌つたものである。つまり八千矛の神がその妻の嫉妬心をたし
なめようとした歌である。○まつぶさにとりよそひ……はしかと装ひ着て、○沖つ
鳥胸見る時……は水鳥はよく頸を伸べて自分の胸や背を見るものであるから云つた
のだ。○袖手揚は袖を舉げてあちこちと自分の服装を見る様である。○これはふさ
はずは之は似合はぬとの意。○邊つ波そに脱ぎ棄て……のそは限りの意、海邊の波
の遠くに脱ぎ棄てよの意、○鳩鳥は青さの枕詞でぬば玉の黒きと同じである。○山
縣に覓たぎし茜春さ……は山地に捜しもとめた茜の草を春いて、○染め木が汁に染め
衣を……はその染め木の汁に染めた衣服の意。○こしよろしは之れはよく似合ふと
の意、○いとこやの妹の命……は愛し子のわが妹よの意、○むら鳥のわが群れ往な
ば……は群鳥の如く我が親族従者どもを引きつれて行つてしまつたらばの意、○ひ

け鳥のわが引け往なば……は引鳥にて一羽が舞ひ起てば總てがそれに引れて舞ひ立つ鳥を云ふ。○山戸の一本すゝき……は山のふもとの一本すゝき。○頸傾ふし汝が泣かさまく……は頸を垂れて汝も泣かうとするのであらう。泣かさまくのまくはむと同じだ。○淺雨はさ霧の枕詞、○若草の妻の命……は草の若葉は二つ相對して生ふるものだから、妻の枕詞となつたのだ。命は尊稱した言葉である。

此の歌は八千矛の神が皇后の嫉妬深さに堪へかねて、出雲の故郷を棄て、はる／＼大和の國に行かうとする旅立ちの光景を歌つたのであるから、その心持ちでこの歌を解さなければならぬ。前半はその旅立ちの服装について種々に苦心したことを述べてゐるので、斯く服装を美にするのは妻へ對して思はせぶりにするのである。斯様に苦心して華やかな姿をして大和へ行くならば、大和の女といふ女は皆自分戀ひ寄るであらう。それだからお前のやうな嫉妬深い女に拘づらはつてゐるに及ばない……と如何にも妻をたしなめるやうに歌つたのである。

一篇の意は、先づ黒い衣服をしかと装つて水鳥の胸を見るやうに袖をあげてあちこちと我が服装を見るに、一向似合はないから、海に脱ぎ棄て、しまつた。次ぎに青い衣服を装つて例の如く見まわすに之れも似合はないから矢張り棄て、しまつた。そこで山に探し求めた茜を舂いてその汁に染めた緋の衣服を装つて例のやうにして見ると、今度はよく似合ふ——さぞ行く道々のをとめたちが戀ひ寄ることだらう——さていとしい妻よ、斯うして群鳥の如く皆打ちつれて、引鳥の如く皆ひきつれて彼方へ行つてしまつたならば、さぞ汝も寂しからう。瘦我慢に泣かないとは云ふものゝ、矢張耐へ兼ねて、あの山の麓の一本薄のやうに首を垂れてしめ／＼と泣くことであらう。さうしてあの野邊になびくさ霧のやうに涙にぬれて日毎行んで己れの行くへを忍ぶことであらう我がいとしい妻よ……。

八千矛の神の命や吾が大國主こそは、男にいませば、打ち見る島のささく、
かき見る磯のささあちず、若草の妻持たせらめ。吾はもよ女にしあれば、
汝措きて男はなし、汝措きて夫はなし、綾垣のふはやが下に、蠶糸にこや
が下に、袴衾さやぐが下に、あわ雪の若やる胸を、袴綱の白さたぐひさ、
そ手抱き手抱き交り、眞玉手玉手さし纏き、股長に寝をしなせ、豊御酒た
てまつらせ。(古事記)

夜知富許能、加微能美許登夜、阿賀於富久邇奴斯許曾波、遠邇伊麻世婆、
宇知微流、斯麻能佐岐邪岐、加岐美流、伊蘇能佐岐於知受、和加久佐能、
都麻母多勢良米、阿波母與、賣邇斯阿禮婆、那遠岐且、遠波那志、那遠岐
且、都麻波那斯、阿夜加岐能、布波夜賀斯多爾、牟斯夫須麻、爾古夜賀斯
多爾、多久夫須麻、佐夜具賀斯多爾、阿和由岐能、和加夜流牟泥遠、多久
豆怒能、斯路岐多陀牟岐、曾陀多岐、多々岐麻那賀理、麻多麻傳、多麻傳

佐斯麻岐、毛々那賀邇、伊遠斯那世、登與美岐、多且麻都良世、

之れは前の歌の返歌と見るべきもので、夫神なる八千矛の神が嫡後の嫉妬に僻易して大和へ逃れ行かうとして、歌で其の意を示したから、姫は此の歌を歌つて更に夫神の心を引き留めようとしたものである。○吾が大國主こそは……大國主は即ち八千矛の神の別名であるが、爰は崇稱して云つたのである。あなたは男であればの意。○打ち見る島のささく、打ちは次のかき見るのかきと同じく發語であつて別に意味はない、島のささくとは何處の島へ行かうとも行くささくでの意、○かき見る磯のささあちず……。のかきはうちと同じく發語である何處の磯へ行かうともその行くささく漏らさずの意、○妻持たせらめ……は妻を持つであらう、○吾はもよ……のもよは感嘆詞、○汝措きて男はなし。あなたより外に男は無い。○汝措きて夫はなし。あなたより外に夫とすべき人はない、○綾垣のふはやが下に……は綾を以て圍める部屋にて、ふはやは、布又は綿などの柔かにふはくするのを云ふ

のである。こゝはその圍んだ綾の帷幕のふはくと柔かに靡く部屋にて……の意である。○蠶衾にごやが下……のむしぶすまは絹衾の意で、絹は蠶の繭から取つた絲で織つた布であるからである。にごやが下は柔やが下の意味で、つまり柔かい衾の下といふことである。○栲衾さやぐが下……は栲の木で織つた衾のさやぐと音する下での意、○あわ雪のから股長に寝をなせまでは前の歌の解に詳しく云つて置いた。○豊御酒たてまつらせ……の豊は賞美して云ふ言葉、たてまつらせは聞き食せの意で、御あがりなされませの意味である。

一篇の意は、八千矛の神の命よ、(吾が大國主の命)あなたこそは男でありなされるから、妻を求めに何處へ御出でなさらうとも、行くさきぐ漏らすことなしに御意に召した美しい妻をお持ちなさることが出来よう。けれども私は女であるから、あなたより外に男も無ければ、あなたより外に夫もない、——さう云ふ可憐しい身分であるから、さう御怒りなされずに、何卒こゝに居つて下さい、——で今宵はあ

の部屋に綾の帷幕を垂れて、柔かい衾を着、すがくしい夜具のさやぐと音する下で、雪のやうなこの若い胸を此の白い腕を互に抱きまじへて、手と手とさし交はし、股を伸べて安らかに寝ませう、いざまづ此の美酒を御召しあがりなさいませ……と男神の御怒りを解かうとして、酒をすゝめ、さらに綿々たる情意を以て命の心を取りなし、斯うして命の大和へ行くのを思ひ止まらせようとした歌である。

○

阿治志貴高日子根の神、天若日子の喪を吊ひに天より降り來れるが、或る事に依りて大に憤り

たまひ、その喪屋を壊ちて飛び去れる時、その妹高姫の命、兄の御名を顯はさんとして歌へる

歌

天なるや、弟棚機のうながせる、玉の御統御統の、あな玉はや、深谷二亘
らす、阿治志貴高日子根の神ぞや。(日本紀神代卷)

阿米那流夜、於登多那婆多能、宇那賀世流、多麻能美須麻流、美須麻流能

阿那陀麻波夜、美多邇布多和多良須、阿治志貴多迦比古泥能、加微曾也、

之れは高姫の命がその兄の容姿の秀麗なるを賞めたゞへて兄の面目を顯はさんとして歌つたものである。○天なるやは天にいますの意、○弟棚機のうながせるのうながせる……の弟は凡て若く愛らしきものを表はす言葉で、おとめ、おとひめ、おと橋姫など、云ふのもある。棚機は織のことで、こゝでは機織女のことを云ふたのである。○うながせる……は頸に懸けたるの意。玉の御統……は玉を貫きて緒に括り統べたのを云ふのだ。○あな玉はや……は孔玉あなだまであつて緒に貫くために孔を穿けてある玉をいふのだ。はやは感嘆詞である。○深谷二亘らす……は谷二つに亘つての意。一篇の意は、天上の高さにいます若い美しい機織女の頸うなじに懸けた御統みすのあの孔あな玉たまの美しいことよ、恰好ちやうどその織女オリカの装ひと同じように、今此の山の谷二つに亘つて照りかゞやくばかりの装ひをしてゐる神の姿の美しいことよ、その神こそは我が兄君の河治志貴高日子根の神である……。

○

此の時又歌へる歌

あまさかる鄙のりつ女の、い渡らす瀬と、石川片淵かたがは片淵に、網張り渡し、めろよしに、よし寄り來ね。石川片淵。(日本紀神代卷)

阿磨佐箇屢、避奈菟謎廼、以和多羅素西渡、以嗣箇播箇柁輔智箇柁輔智爾、阿彌播利和多嗣、妹盧豫嗣爾、豫嗣豫利據彌、以嗣箇播箇多輔智、

之れは紀に前の歌と續けて、下照姫が再び歌つたものゝやうに記してあるけれども、下照姫の歌つた歌では無く、雅樂寮の樂の譜から取つて入れた時に、こゝに紛れ込んだものらしいと云ふ説が眞實に近いやうである。○あまさかるは鄙の枕詞、○鄙のりつ女のい渡らす瀬……は鄙の女の渡る瀬であるからとての意、○石川片淵は、石の多い河原を瀬が一方の岸へ片寄つて淵になつてゐるのを云ふのだ。山の川などに斯う云ふ景は今もよく見る處である。○めろよしに……のめろは目等めらと同じで、

網の目のことである。よしは寄しにて、寄せといふべきを詠つたのである。つまりこの一句は網を引く人の方へ自然に網の目が寄つて来るやうに、我が戀する少女達も我が方へ寄り来よと戯れのやうな譬喩をしたのだ。○よし寄り来ね……は寄せ寄り来れの意。

一篇の意は鄙の少女たちの渡る河瀬であるかとて、その石河の片淵になつてゐる處へ網を張つて少女たちの来て網に掛かるのを待つてゐる。さあその網の目が網を引く人の方へ自然に寄つて来るやうに、我が思ふ少女たちも我が方へ寄つて来い……と田舎風に幼稚な譬喩を以て歌つたのである。

○

彦火々出見尊の妃を豊玉姫と云へり。産屋に入りて將さに生みまさんとしける時、尊そを垣間見たれば、姫いたく恥ぢ恨みて海に入り給ひぬ。その時彦火々出見尊の歌へる歌

沖つ藻は邊には寄れども、さ寝床もあたはぬかもよ濱つ千鳥よ。(日本紀神代卷)

憶企都茂幡、陸爾幡譽辰耐母、佐禰耐據茂阿黨播怒个茂譽、播磨津智耐理譽、

○沖つ藻……は沖の遠い所に生へたる藻である。○邊には寄れども……は海邊に寄り来るの意、○さ寝床のさはさ夜さ衣などのさと同じの發語である。○あたはぬかもよ……はできないのかまあの意味で、能はぬことかまあ……と詠嘆したのである。○濱つ千鳥よ……はその際眼前の景物を捉へて、それに自分の感情を托したのである。

一首の意は、沖に生ふる藻はこれこのやうに岸近くへ寄つて来るのに、なぜ姫は此の藻のやうに此處へは寄り来ぬぞ。あゝもう姫と逢つて寝ることも出来ないのかそこの濱千鳥よ……とせめて海邊の千鳥に向つて、自分の切なる胸を訴へようとした歌である。實に感情の満ちたよい歌である。

此の歌は日本紀の記す處によれば、瓊々杵尊の歌はれたものとなつてゐるが、そ

れは本書編纂の際に、次ぎの「沖つどりかもづく鳥云々」の歌と互ひに初句が似通つてゐるので、あちこち入りちがつたものであらうと云つて、橘守部は詳細に考證してゐる。余も守部の説に従つて解釋を下したのである。

○

彦火々出見尊又歌へる歌

沖つ鳥かもづく鳥に吾が寝ねし妹は忘れじ世のことくくに 同上

意岐都登理、加毛度久斯麻邇、和賀韋泥斯、伊毛波和須禮士、余能許登基登邇、

○此の沖つ鳥はかもと云はん爲めの枕詞である。○かもづく鳥……はかみづく鳥の意で、かみは神の意である。づくは秋づく色づくのづくと同じで、秋めく色めくなど皆同じ意である。こゝはつまり神めく鳥の意で、彼の彦火々出見尊が嘗て海神の宮で豊玉姫に初めて逢つた時のことを懐かしく思ひ出したのである。○世のこと

くに……は世の盡々で、此の世のあらん限りといふ意である。

一首の意は、あの神々しい海神の宮で、吾れと寝た處女のなつかしいことよ、その處女のことよ、いつまでも忘れまいぞよ……と之れも戀愛の詠嘆の歌である。

○

其の後豊玉姫は生みませる皇子の美はしき事を人傳に聞きていたくあはれになり、依つて海より歸らんとしけれども、其のことはりなく、止むを得ず妹玉依姫を遣はして皇子を養はしむ。此の時豊玉姫返歌を詠みて彦火々出見尊に献れり。

赤珠のひかりはありと人はいへど、君がよそひし尊くありけり。 同上

阿加陀麻波、袁佐閉比加禮杼、斯良多麻能、岐美何余曾比斯、多布斗久阿理祁理 (古事記)

此の歌古事記には「赤珠は緒さへひかれど白珠の君がよそひし尊くありけり」となつてゐる。此の方は大變に調子がよすぎる。古代の歌としては如何であるか、と

にかく爰では日本紀の方を標準として解をした。○赤珠は色の赤い珠である。こゝでは産まれた御子を赤珠に比して云はれたのである。○君がよそひし尊くありけり……は君の装いは尊いの意、此の装ひしのは言葉に力を添へる助辭である。装ひはといふよりも、装ひしと云つた方が遙かに力づよく聞こえる。

一首の意は、赤珠の輝りかゞやくやうに我が子が美しく生ひ立つといふことを人傳に聞くが、それよりもあなたのことが思はれてならない。あの美しく尊い装ひをされてゐるあなたの御姿が……。

神武時代の歌 (橿原宮朝)

○

神武天皇大和に入りて草賊の難を平げ巨魁兄猪を宇陀の野に斬る。此の時天皇弟猪の獻げたる大饗を諸軍に頒ちたまひて歌へる歌

宇陀の高城に鳴わな張り、吾が待つや鳴はさやらず、いすくはし鯨さやる。前妻が魚乞はさば、たちそばの實の無けくを扱さしひえね。後妻が魚乞はさば、いちさかさき實の多けくをこきだひえね。(古事記)

宇陀能多加紀爾、志藝和那波理、和賀麻都夜、志藝波佐夜良受、伊須久波斯、久治良佐夜流、古那美賀那許波佐婆、多知曾婆能、微能那祁久袁、許紀志斐惠泥、宇波那理賀、那許波佐婆伊知佐加紀微能、意富祁久袁、許紀陀悲惠泥、

之れは神武天皇が大和の戦争に勝たれた際の饗宴の祝歌として解すべきものである。勝ち勇まれた天皇の御喜びが面白い譬喩となつて表はされてゐる。○鳴わな張り……は鳴を捕る爲めに張る罾のことである。○いすくはし鯨さやる……は雄大な鯨が掛かつたとの意。○前妻が……は着馴女といふ言葉の變化したので着ふるした衣服のやうにもう古くなつた妻といふ意である。○たちそばの實の無けくを……は

そばの木の實のやうに少しばかりをの意、○扱きしひえね……はその魚の肉を扱き
落しへぎ取つて與へよの意、○前妻が……は矢張り衣服に比して云つたのである。
前妻は着ふるした衣服のやうなものであり後妻はその上へさらに新しく重ねた衣服
のやうなものである。それで後妻をうはなりと云つたのである。又、こなみを本妻、
うはなりを妾と見ることが出来る。前妻は厭かれた女であり、後妻は現在愛着して
ゐる女である。その意味がこの歌に表はれてゐる。○いちさかき實の多けくを……
はいちさか木の實のやうに多くをの意、○こきだひえねは……許多と同じである。
ひえね……はへぎ與へるとの意、

一篇の意は、宇多の城に鳴良を張つて賊たちが今にも獲物があらう待つてゐると
鳴は掛からないで、勇ましい鯨のやうな皇軍が引掛つた。——その鯨のために却つ
てあべこべに自分たちが殺されてしまつた——さあ我が兵士どもよ、お前たちの古
い女房が魚を欲しいと云ふならば、そばの木の實のやうに少しばかりその肉をへぎ

取つて呉れてやれ、又現在の女房が魚を欲しいと云ふならばいちさか木の實のやう
に多くを幾らでもへぎて呉れてやれ、……と戯れのやうに歌つて、兄猪の脆くも討
たれたのを嘲笑されたのである。勇壯な勝鬨の群が今酒宴を眼の前にして喜び歌ふ
様も明かに見える……。

○ 神武天皇八十歳を國見丘に討たんとして歌へる歌

神風の伊勢の海の、大石いはひもとほる、したみのく。吾子よ吾子
よ。したみのいはひもとほり、撃ちてしまひ、撃ちてしまひ。(神武紀)
伽牟伽能、伊齊能于瀾能、於費異之珥、異波臂茂等倍屢、之多儻瀾能、
之多儻瀾能、阿誤豫阿誤豫、之多太瀾能、異波比茂等倍離、于智且之夜莽
務、于智且之夜莽務、

神風の……は伊勢の枕詞、○大石にいはひもとほる……大きな石に這ひめぐつて

ゐる。○したぐみは細螺といふ貝のことで、今のさぐへに似てもつと細小なる貝、
○吾子よ吾子よ……は天皇が自分の帥ふる軍兵に向つていふ言葉である。○撃ちて
し止まむ……は討ち果たさうの意、しは例の強める助辭である。

一篇の意は、この伊勢の海の大きな石に這ひめぐつてゐる小貝のやうに、群が
り集へる我が軍兵どもよ、その小貝の群がり這ひめぐる如く、吾れ等も早く大和へ
行つて彼の八十梟の賊を討ち果たさうではないか……。

○

道臣命忍坂に管を堀りて敵をこゝに欺き入れ敵と與に酒を酌みたり。命豫め士卒と謀り

て曰はく酒酣ならん時、われ起ちて歌はむ。わが歌聲を聞かば諸共に敵を屠れと、此の時道臣
命起つて歌へる歌

忍坂のおほむろ屋に、人さはに入り居りとも、人さはに來入り居りとも、
みづくし久米の子等が、頭槌石槌もち撃ちてし止まむ。(神武紀)

於佐箇迺、於朋務露夜珥、比苔瑳破爾異離烏利苔毛、比苔瑳破爾、枳伊離
烏利苔毛、瀾都瀾都志、俱梅能固邏餓、句鶯都々伊、異志都々伊毛智、于
智豆之夜莽務、

○忍坂のおほむろ屋……は忍坂の大きな窰の家といふ意、○人さはに入り居りと
も……は敵が澤山來て居るとも、○來入り居り……之れも前の句と同じ、○みづみ
づし久米の子等がのみづくしは久米の子等の勇壯にしてたのもしいのを賞美した
形容詞である。久米の子等は久米部の子等といふ意味で、久米部は道臣命の帥ゐて
ゐた皇軍の軍隊の名である。久米部の語原は組部であつて部隊もしくは隊伍を意味
してゐる。此の軍隊を統べてゐたから、道臣命を大伴の久米部の主とも呼んでゐた
のである。大伴は大いに伴ふの意で、今の大将とか元帥とか云ふ言葉と同じでてる
○頭槌石槌もち……は當時の武器であつて頭及び石はともにその武器の堅固なこ
とを賞美して云つた言葉である。船のことを磐船と云ひ、座のことを岩座と云つた

と同じである。つゝゝが約まつてつちとなるのである。で頭槌石槌とあるから槌と思ふ人があらうが、之れは槌では無く矢張り劔のことを云つたのである、頭槌の劔石槌の劔といふのである。

一篇の意は、忍坂の大害に土雲梟帥等が澤山来てゐると云ふが、よし如何に多く来てゐるとも、我がみづくしい來目部の子等が鋭い劔を以て撃ち亡ぼすに何事かある……と勇んで歌つた歌である。

○

此の時歌ひ終るとともに久米部の子等が一時に起けて敵を討ちたるに、一人も残すところなし。

皇軍大いに悦び天を仰いで笑ひ、因つて歌へる歌

蝦夷を、一人百人といはれども手向ひもせず。(神武紀)

愛瀨詩鳥、毗登利、毛々那比苔苔、比苔破易倍廻毛、多牟加比毛勢儒、

○蝦夷は當時の土蜘蛛、梟等の總稱であつて、それ等の容貌がすべて毛深くひく

つけき有様であつたから、それを鬚の多い蝦に比して、えみしと云つたのである。○一人百人といはれども……は其の時代之れ等の蠻族等は非常に力があるので彼等の一人は普通の百人に相當すると云はれてゐたのである。今の所謂一騎當千といふのと同じである。百人は百の人である○手向ひもせずは抵抗もせず、もろく討ち亡ぼされてしまつたの意。

一篇の意は、あの土蜘蛛、梟等は非常に力が強くて一人は百人に當るといはれて居たが、今は手向ひて戦ふこともせず、もろく打ち滅びてしまつた……。

○

皇軍將に磯城津彦を攻めんとす。然るに之れより先き數度の戦ひを経たれば今は少しく疲れざるにあらず。神武天皇依つて御歌を歌ひて將卒を慰めたまへり。その歌

楯なめて稻佐の山の、木の間ゆもいゆきまもらひ、戦へばわれはや飢ぬ、
島つ鳥鶉養が伴、いまずけに來ね。(神武紀)

哆々奈梅且、伊那瑳能椰摩能、虚能莽由毛、易喻者摩毛羅毗、多々介倍磨、
和例破椰隈怒、之摩途等利、宇介譬餓等茂、伊莽輸開珥虚禰

○たゝなめて……は楯を並べての意、たてをたゝと云ふ。いね(稻)をいなと云ひさ
け(酒)をさかと云ふと同じである。稻佐の山は今も大和の宇陀郡山路村の近傍にあ
る。又山路山とも云ふのである。○いゆきまもらひ……のいは發語でまもらひは守
りを延べてまもらひとしたのである。○われはや飢ぬ……は吾れは飢えたの意、○
鳥つ鳥鶺養が伴……の鳥つ鳥は鶺の枕詞である。鶺養が伴は此の時神武天皇に屬し
て朝夕の御膳部を擔當してゐた人々のことである。○いますけに來ね……は今助け
に來よの意で、はやく助けに來よと天皇が戯れて仰せられるのである。

一篇の意は、楯をならべて稻佐山の木の間を行き通ひ、守りつ戦ひつしたれば、
もう此のやうに飢え疲れてしまつた。我が鶺養部の者ともよ、はやく御饌をもつて
助けにまゐれ……

○
其の後天皇將に登美彦を討たむとして歌へる歌

みづくし久米の子等が、粟生には菫ひと本、其根がもと其根芽つなぎて、
討ちてしやまむ。みづくし久米の子等が、墻下に植ゑし胡椒、口ひびく、
吾れは忘れず、討ちてしやまむ。(神武紀)

美都美都斯、久米能古良賀、阿波布爾波、賀美良比登母登、曾泥賀母登、
曾泥米都那藝豆、宇知豆志夜麻牟、美都美都斯、久米能古良賀、加岐母登、
爾、宇惠志波士加美、久知比々久、和禮波和須禮受、宇知豆斯夜麻牟、

此の歌は、其の當時の賊軍を菫や胡椒に譬へて詠まれたのである。彼れ等は宛も
皇軍の領地内に生へてゐる菫や胡椒のやうなものであるとの御意である。○粟生に
は菫ひと本……の粟生は芝生蓬生など、同じで粟の生へてゐる畑地である。つまり
久米部の子等の畑地のことである。菫は今云ふにらである。○そねがもと……は其

の根の莖こゝろの意、○そねめつなぎて……は其の根と芽とをつなぎての意で、つまり親も子も總ての眷族どもを一緒にといふ意である。○墻下に植ゑし胡椒……は墻根に植ゑた胡椒、○口ひしく吾れは忘れず……は其の胡椒の口に疼いたいて辛いやうに、彼の賊たちの恨みが骨身ほねみにしみて忘れないといふ意である。

一篇の意は、みづ／＼しい我が皇軍の領する粟生あはけに生へてゐるあの一本の萐たけのやうな賊どもよ。其の賊どもの親も子も一緒に討ち果たしてやらう。又我が皇軍の住まへる家の垣根に生へてゐる胡椒のやうな賊よ、恨みは骨髓せつねいにしみて忘られない、さう討ち果たしてくれよう……。賊をそれ等の草木に比したのも面白い、さうしてさらにその賊に對する恨みを胡椒の口にひしくのに譬へたのも實に驚發の御才である。

神武天皇、皇后とすべき姫を求めんとて、或る日大久米命と與に大和の高刺野たかしのに行幸ありける

に、一群の姫達に逢へり。此の時天皇と命と互に問答せる歌

大和の高刺野を七行くをとめども、誰れをし纏むすかひ。(大久米命)かつくも
いやさきだてる美をし纏むすかひ。(古事記)

夜麻登能、多加佐士怒袁、那々由久袁登賣杼母、多禮袁志摩加牟(大久米命)
加都賀都母、伊夜佐岐陀豆流、延袁斯麻加牟(神武天皇)

之れは後世の男女が見合をするやうな場合の歌とも解せられる。此の歌では大久米命が媒酌まいたせの位置にあるのである。高刺野で逢つた一群の姫達を指して大久米命が天皇に何れのをとめが御意に御召しになりますか……と問ひかけたのである。すると天皇は最前まへにゐるのが好い……と御答へになる。此の問答を歌で交換してゐるのである。此の時最先まへに立つてゐられた姫が即ち彼の伊須氣余理姫いすけのりひめである。又此の大久米命といふ神は前に述べた道臣命のことである。久米部の長であるから大久米命といつたのだ。○大和の高刺野といふ野は今の十市郡南浦地方をさす。○七行く少

女ども……は七人と定まつた數ではない、たゞ多數を示すのである。○誰れをし纏かむの纏かむは纏き寝るといふ意味で、男女相寝る時は手を纏ひて寝る故に斯う云つたのだ。○かつくもはかたぐの意で、かたぐはあちこち心の分かれる場合に云ふ言葉である。こゝでも天皇の御心はさう一途になつて云つてゐるのではなく、どれでもよいがまあその邊の一番先きにゐる姫を……といふ位ゐの御心であるから、かたぐと生中の言葉で歌つたのである。○美をし纏かむ……は美は美男美女など、云ふ言葉もあるので、凡て美しいもの、好ましいものをいふ言葉である。こゝでもそれと同じ意味で、その最先の美しいのを纏き寝よう……と歌たはれたのである。

一篇の意は、大和の高刺野を群れつゝゆくあの女の中のどれを御召しになります——斯う問ひかけられたので天皇は答へた——いやどれといふでも無いが、まああの最先の美しい姫を喚ばう……。

○

こゝに於て大久米命は天皇の御意を姫に通じけるが、姫は此の時命の顔貌のいかめしくして、ことに恐ろしき眼してゐたりけるをあやしみて、さて命と互に問答せる歌

あめつゝ千人勝人と、など裂ける利目(余理姫)をとめにたゞに逢はむと、吾か裂ける利目。(大久米命) 古事記

阿米都々知杼理麻斯登々、那杼佐祁流斗米(余理姫) 袁登賣爾多陀爾阿波牟登、和賀佐祁流斗米(大久米命)

○あめつゝ……は天地の意、つちのちがつとなるはちとつと同行の音であるからだ。此の例は他にもある。○千人勝人と……はちたり勝人といふべきであるのを、ちたりのたとは同行音なるが故互ひに通つてとなつたのである。千人勝人とは千人にも勝る人といふことである。命は久米部の長であるから、斯う云つたものである。○など裂ける利目……のなどはなぜの意、又裂ける利目に就いては古へより

諸説まち／＼であるが、之れは大久米命の眼が恐ろしく大きくて、眦が鋭く裂けてゐたので、斯う云つたものと思へる。利目は鋭き目である。此の他の説の中で多少参考になるものには、此の裂ける利目を胃と解してゐる、大久米命が被つてゐた胃の眼が横に裂けて恐ろしい形になつてゐたので、斯う云つたものだらうと云つてゐる。○をとめにたゞに逢はむと……のたゞには直の意で、直接といふのと同じである、つまり今の言葉で云へばまともに見ようと思つて……の意、

一篇の意は、此の天地の間に於いて久米部の長と呼ばれてゐる命であるのに、なぜ其のやうに恐ろしい鋭い眼をしてゐるぞ、——斯う姫に云ひかけられたので、命はそれに答へて歌つた——その不審は尤もであるが、實は今日此の野で貴女を見損はないやうに正面に行き逢はうと思つて、斯んな大きな目をして來たのだ……と之れは命が戯れて云つたのである。或ひは此の歌全部を凡て戯れの意味に解する方がよいかも知れぬ。即ち、「千人勝人である身分にも似合はない、なぜそんなに大きな

目をして物をさがすのだ——いや實はさう云ふあなたをさがさうと思つてさ……。」
斯う云ふ戯れのやうな問答を歌つたものと見るべきであるかも知れぬ。

○

斯くて伊須氣余理姫は天皇に仕へまつりぬ。姫の家は畝傍山の近傍なる狭井河のほとりにあり。
依つて天皇先づ此の家に至りて一夜相寝たまひしが、後程經て天皇の歌ひたまへる歌

葦原のしげこき小屋に菅疊、いやさや敷きてわが二人寝し(古事記)

阿斯波良能、志祁古岐袁夜爾、須賀多々美伊夜佐夜斯岐豆、和賀布多理泥
斯

○葦原とはその當時河のほとりには葦が生へてゐたから斯う云つたのだ。○しげこき小家は濕ける家といふ意味で、葦のしめやかなる家で……。○菅疊は菅にて織つた疊である。○いやさや敷きて……は彌清敷きての意で、いやさやかに敷くのである。菅疊の清々しいのを爽かに敷いて……。○わが二人寝しは、二人で寝たといふ

のである。此の歌はその事ありてより暫く程輕て姫が皇后となつて御所に入内された時、天皇がその當時をおもひ出して歌つたのであるから、此の歌の餘情には當時を懐かしく思召される心持ちが籠つてゐる。

一首の意は、あの川邊の葦のしめやかな家で、すが疊をさや／＼と敷いて吾れ等二人は相寝たのである。その相寝た當時が今もなつかしく思ひ出される。……此の歌姫の狭井川の家光景も鮮やかに見える。又天皇が今その姫を皇后として宮殿に迎へ入れて一緒に同棲されるやうになつたので、一層その當時の新枕のことがなつかしく胸に浮ばれたのである。さういふ追憶の歌として、まことに秀れた御名歌である。

○

斯くて神武天皇と此の皇后との間に生まさせる皇子三人ありけるが、天皇の崩れましける後、之れ等の皇子の庶兄なる手研命叛逆の心を挟みて天皇の御位を奪はんとし、依つて此の皇子等

を殺さんとしけり。皇后豫め之れを察したれば、歌を以て皇子等に此の事を知らしめたまへり。

その歌二首

狭井河よ雲立ちわたり畝傍山木の葉さやぎぬ風吹かむとす。

佐韋賀波用、久毛多知和多理、宇泥備夜麻、許能波佐夜藝奴、加是布加牟登須、

畝傍山ひるは雲とゐ夕されば風吹かんとぞ木の葉さやける。(古事記)

宇泥備夜麻、比流波久毛登韋、由布佐禮波、加是布加牟登曾、許能波佐夜牙流、

此の二首何れも解し易い歌である。二番目の歌で。○ひるは雲とゐ……は日中は雲と居であつて……日中は雲と興にかくれてゐて……といふ意である。

初めの歌の意は、見よ我が子よ。狭井河にむら雲が立ち渡つてゐる、またあの畝傍山に木の葉がざわ／＼と音を立てゝゐる。此の有様はやがて風の吹き寄せて来る

前兆であるぞよ。

次ぎの歌の意は、あの畝火山に日中は雲にかくれてゐるが、夕暮れになるとざわ／＼と音を立て、風が吹き起らうとしてゐる。その風を警しめよ……と之れも前の歌と同じ心である。

○ 崇神時代の歌 (瑞籬宮朝)

○ 崇神天皇の八年夏四月高橋の邑の人活日を御諸の三輪大神宮の掌酒と爲せり。後天皇御諸に行幸し特に大田々根子をして大神を祭らしむ。此の時活日、神酒を天皇に獻げて且つ歌へる歌

この神酒は我が神酒ならず、日本作す大物主、醸みし神酒、幾久、々々

(崇神紀)

許能瀾枳破、和餓瀾柘那邏孺、椰磨等那須、於明望能農之能介瀾之瀾枳、

伊句臂佐伊句臂佐

○この神酒は……此の献つる酒はの意、○わが神酒ならずは自分の醸もした酒では無い、○日本作す……は此の日本國を産り成したの意、○大物主の醸みし神酒……の大物主の神とはかの古事記に海を光やかして依り來れるとあるその神で、大國主神の別の名で、日本の作り主である。其の大物主の醸もし作つた酒であるとの意此の大物主神は後大和の青垣の東の山に齋き祀られたので、所謂三輪の大神のことである。○幾久々々……は幾代久しく此の御酒を召し上がりませと云つて大君の齡を祝つた言葉である。

一篇の意は、此の今天皇に献げまつる酒は、自分の醸し作つた酒ではない、之れは大日本を作つた大物主の神——則ち今自分が掌酒となつて仕へてゐる此の三輪大神が醸した酒である。さあ此の酒を幾久しく御召し上がり成されませ。

斯く歌ひて神宮にて宴しけり、やがて宴終ふる時、臣等の歌へる歌

美酒三輪の殿戸の朝戸にも、出で、行かな、三輪の殿戸を。(崇神紀)

宇磨佐開、瀨和能等能妬能、阿佐妬珥毛、伊第豆由介那、瀨和能等能渡塙、

○美酒三輪と續くることは萬葉などにも多し、其の起源は此の歌より出でたのである。既に説いたやうに、此の三輪大神の宮に酒掌の官を置いて神酒を醸させたから、美酒の三輪といふ一つの言葉が出来たのである。○殿戸の朝戸にも……はその神殿の戸をいふのである。朝戸とは朝戸を開くことを朝戸と云ひ、夕に戸を開くことを夕戸と云ふのだ。○出で、行かな……は出で行かうの意。

一首の意は、今日此の宴會のたのしみは飽く時もないから、今夜一夜は家へも歸るまいが、夜が明けて此の三輪の神殿の戸を開ける頃にもなつたらば、こゝを出て立ち歸らう、此の神殿の戸を開けて……、神殿内に美酒に酔ひつゝ、よもすがら天皇の一座が歌ひ楽しんだ光景が見えるやうである。

○

此の時天皇もまた歌ひたまへり、その歌

美酒三輪の殿戸の夕戸にも、おし開かね、三輪の殿戸を。(崇神紀)

宇磨佐階、瀨和能等能妬能、由赴妬珥毛、於辭寐羅箇彌、瀨和能等能渡塙、

字解は前の歌と略ぼ同じである。○夕戸にもおし開かね……は夕戸を開いて歸れと命ずる意である。ねといふ言葉は命令もしくは願望する意の言葉である。此の歌は前の歌に、臣等が夜を一夜酒を飲まうと云ふのを、天皇が聞かれて、さう長居をするなど、やゝ戒める御意で歌はれたのである。

一首の意は、さあ汝等、さう飲み明かして朝戸に歸るなどと云はずに、今此の夕べの戸を押し開いて、早くまかり歸れさう長居は神慮もいかがと思ふに……。

○

崇神天皇初めて四道將軍を置きぬ。此の時大彥命は北陸の將軍たり。任を以て越の國に赴かん

とするに、たましく山城の籠坂に神の少女に逢へり、少女歌を以て、天皇の身に危難の迫れる
を告げて途より歸らしむ。その歌

こはや御間城入彦はや、御間城入彦はや、おのが緒をぬすみ死せむと、後
つ戸よい行きたがひ、前つ戸よい行きたがひ、うかゞはく知らにと、ひめ
なびそすも、御間城入彦はや。(古事記)

古波夜、美麻紀伊理毘古波夜、美麻紀伊理毘古波夜、意能賀衰々、奴須美
斯勢牟登、斯理都斗用、伊由岐多賀比、麻幣都斗用、伊由岐多賀比、宇迦
々波久、斯良爾登、比賣那曾毘須母、美麻紀伊理毘古波夜、

○こはやは之れはやにて之れはまあ……と感嘆したのである。○御間城入彦はや
……崇神天皇の御名を御間城入彦と申したので、こゝもはやといふ感嘆詞をそへて
危難の容易ならぬことを注意したのである。○おのが緒……は己が玉の緒といふの
で、玉の緒は命である。○ぬすみ死せむと……は竊み死せしめんの意でひそかに殺

さんとしての意、○後つ戸よ……は御殿の後の戸より……の意、○い行きたがひ……
はあちこち行きちがふことである、○前つ戸よい行きたがひ……も同様の意である
○うかゞはく知らにと、覗ひ覘ふのも知らずしての意、○ひめなそびすも……は姫
の遊びをしてゐるの意で、當時天皇には群臣たちが皆四道の地方に出で、守備も
無き宮殿に姫達を相手に遊んでゐられたので、その意味を歌つて、大彦を警戒した
のである。

一篇の意は、之れまあ、御間城入彦の命はまあ、御自身の命をひそかに奪はうと
して、御殿の後の戸から、又前の戸から、あちこちと行きちがつて、つけ覘つてゐ
るとも知らず、宮中に姫達を相手に遊んでゐられるが、まあ危ふいことである、あ
ゝ御間城入彦の命はよ……と最後に又天皇の御名を呼んで、切に危難の大事なるこ
とを注意し詠嘆してゐるのである。此の危難は即ち彼の武埴安彦の叛逆であつて、
此の叛逆は後に奈良山の戦ひとなるのである。幾何もなくして此の叛賊は天皇の軍

のために打ち滅ぼされてしまった。

○

崇神天皇の姑に倭迹迹姫といへるがあり。此の姫大物主神の妻となりたるが、此の神は晝は見えずして夜に来る、姫之れを怪しみて晝に來りて美容を見せたまはんことを願ふ。神之れをうべなひ、明くる朝來りて小蛇となりて姫の櫛篋の中に居る。姫驚きて泣き叫びたるに忽ち人の形となりて空に騰り御諸の山に入りましぬ。姫仰ぎ見て悔ゆれども及ばず、則ち箸を以て陰を突いて死にぬ。やがて大市に葬り、之れを箸の墓といふ。此の墓は晝は人作り、夜は神作る。大坂の山の石を運びて作るに、其の運ぶ人々相踵いて手選に石を運ぶ。時人之れを歌にして曰

はく

大坂に踵ぎのぼれる石群を手選に遞さば遞しがてむかも(崇神紀)

飲朋佐介珥、菟藝廼煩例屢、伊辭務邏塲、多誤辭珥固佐摩、固辭介氏務介茂

○大坂は大和國葛上郡にある、此の墓所の大市は城上郡にある、其の間は隨分距

離があるのであるが、その大坂から大市迄石を運ぶのであるから數多の人々が集まつたものと見える。○踵ぎのぼる……はその大坂へ石を取るので人々が列を爲して登つたのである。○石群は石礫のことである。ひらは多數をいふ言葉である。○手選に遞さば……。其の石を運ぶのに手から手へ順送りに送り運ぶのである。○遞しがてんかも……は運び難いことかまあ、運びがたくはあるまいとの意、このかまはかはと同じの反語である。

一篇の意は、こんなに多勢の人が集まつて來て、あれあのやうに大坂に列を爲して登つて行くのが見える。どんなに遠い道であつても、此の人數で彼の石群を手送りに運んだならば運べないことはあるまじう……。

景行時代の歌 (日代宮朝)

景行天皇の十八年秋七月、天皇筑紫の御木に行幸し高田の行宮に在ます。その處に倒れたる老

樹あり。長さ九百七十丈なり。百官有司その樹を踏みて往来せり。湯人之れを踏んで曰はく、朝霜の御木の狭小橋まへつぎみ、い渡らすもよ御木のさ小橋 (景行紀)

阿佐志毛能、瀨概能佐烏廢志、廢弊津耆瀨、伊和哆羅秀暮庸、瀨開能佐烏廢志

此の老樹の倒れたるはその行宮の前であつて、行宮に登應する群臣達は、自然此の木の上を渡らねばならぬやうになつたのである。○朝霜は御木と云はんが爲めの序詞である。御木は御消に通ずる、朝霜は消え易いものであるから御木の同音である處の御消に通はして、其の序詞としたのである。萬葉などにも「朝霜の消ぬべくも吾は思ほゆる」など云ふ言葉がある。○御木の狭小橋……の御木は神木の意である。その神木が倒れて自然の橋になつたので、狭小橋と云つたのである。さ小橋のさ小はさ小鹿のさ小と同じ發語で只橋といふも同じである。○まへつぎみは前つ君である。天皇の御前に伺候して政事を執り行ふ諸卿の意である。○い渡らすもよ

……のいは矢張り發語で、渡るかまあ……と感嘆したのである。

一首の意は、平生は田舎の百姓達ばかりが渡つてゐたこの神木の橋であるのに、今日は天皇の行宮が出来たので、威儀の嚴かな百官達があれあのやうに装束の裾を牽いて渡つて行く、あの神木の上を……と田舎人達が好奇の眼を以て眺めやりつゝ感じて歌つた歌である。筑後の國には今も三毛といふ處がある。此の三毛はやがて御木の橋の事から名附けられたものと見える。

○

日本武尊出雲の國に行啓し、その國の酋長出雲魁を殺さんと欲して先づ魁と友となり與に巖川に水浴みしたまへり。尊之れより先櫟の木を以て偽刀を作りて佩き給ひぬ。尊先づ河より上りて魁が太刀と尊の太刀とを取替へしめ、ここにいざ戦はんと挑み給ひたるに、魁が太刀は偽刀なれば抜くことを得ず。尊依つて其の刀を抜いて魁を打ち殺し給ふ。此の時の歌

やつめさす出雲たけるが佩ける太刀、葛蔓さは纏き錆無しにあはれ (景行紀)

夜都米佐須、伊豆毛多祁流賀、波祁流多知、都豆良佐波麻岐、佐味那志爾
阿波禮、

○やつめさす……は入つ雲さすと同じ言葉であつて、之れは又やつめさすと約ま
るのである。さすは又だつと同じ意味であるから、やつめさすはつまり八雲だつと
同じである。出雲の枕詞である。○葛蔓さは纏き……は出雲魁の佩いてゐた太刀の
柄及び鞘が澤山の蔓で巻いてあつたのである。つまり非常に堅固な太刀であつたこ
とを云つたのである。○錆無しにあはれ……は其の太刀の身に少しの錆も無く銳利
に光つてゐたことを云つたのである。あはれは感嘆詞である。

一首の意は、出雲の梟帥とも云はれるものゝ太刀だけに、その柄も鞘もすべて澤
山の葛蔓で巻き固めてあつたのみならず、其の太刀の身も錆びた處がなく、まことに
銳い刀であつた……。

○

日本武尊東國征伐の途に上りけるが、相模の國にて草賊の爲めに謀られ火難に逢ひ給ひぬ。此
の時尊の妃橘媛の命歌へる歌

さねさし相模の小野に燃ゆる火の、火中に立ちて問ひし君はも (古事記)

佐泥佐斯、佐賀牟能袁怒邇毛由流肥能、本那迦爾多知且、斗比斯岐美波母

○さねさしのさしは前に述べたやつめさすのさすと同じであつて、やつめさすは
又八雲立つの立つと同じ義である。つまりさねだつの意味である。さね立つは即ち
嶺立つの意で、彼の相模、駿河の境上には富士山を初として幾多の山が聳え立つ
てゐるから云つたのである。爾來さねさしは相模の枕言葉となつてゐる。○火中に
立ちて問ひし君はも……は、あの野火の燃えてゐる中に立つてゐながらも、猶媛の
身に恙は無いかと、案じて問はせられた其の夫の尊の御心を切に忝く思ひやる言葉
である。

一首の意は、山々の群がり立つてゐる相模の野邊のあの燃ゆる熾火の中に立つて

猶妻が身の上を案じられ、妻が身の上に事は無いかと問ひ給ひ氣づかはれ遊ばした
我が夫の尊の御心が有り難い。その夫の御心はまあ……と切なる感謝の意を述べて
戀しい情を歌つたのである。心も言葉も秀ぐれてゐる歌である。猶此の歌に歌はれ
てゐる事實は相模にあつたことで無く、駿河であると云ふ説が有力になつてゐる。
それは此の野火の難に逢はれた處は今も焼津と云つて駿河の古蹟になつてゐるから
である。古事記にも「依つて其の地を今に焼津と云ふ」とある。之れによると「さ
ねさし相模」と云ふ言葉が多少不明になるのである。それで或る學者はさがひはさ
上である。その野の上の方との義で、相模の意では無いと云つてゐる。參考迄に此
の事を記して置く。

○

それより尊は上總の國に渡る海上にて暴風に逢ひ桶姫身を沈めて波を治むることあり。さらに
蝦夷を平げて常陸の國に歸り、そこより甲斐の國に出で、酒折宮に入りましぬ。こゝに御火焼

の翁と問答し給へる歌

にひばり筑波を過ぎて幾夜か寝つる(日本武尊)かくなべて夜には九夜、日に
は十日を(翁)(古事記)

爾比婆理、都久波袁須疑氏、伊久用加泥都流(日本武尊)迦賀那倍豆、用邇波
許々能用、比邇波登袁加袁(翁)

此の御火焼の翁とは此の時代燈明の事を掌つた翁である。當時は家々に皆火瓶を
置いて、その中で火を焼いて夜を照らしてゐたのである。○にひばりは新治であつ
て、常陸の國の地名である。筑波も同じく常陸の地名である。○幾夜か寝つる……
は幾夜寝たであらうとの意、○かくなべて……は日々並べての意であつて、月日の
順次に重なつて行く意味である。○夜には九夜、日には十日を……は夜は九夜で日
は十日を重ねてゐるの意

一首の意は、旅の日數も、はるくくと積り積つたが、さてあの新治や筑波を過ぎ

て幾夜旅に寝たことであらう——斯う尊が歌ひかけたので、御火焼の翁が答へて歌つた。——いかにも仰せの通り長い旅路でありました。夜は九夜、日では十日になりませす……。

○

やがて甲斐より科野に越え給ひ、更に尾張に入りましぬ。こゝに^{いでたち}出立の際に契りおき給ひつる宮簀媛の家に宿りたるに、^{おほみか}媛大酒盞を獻げて奉る。此の時媛の^{あしひ}襲衣の裾に^{つき}月經^{のわり}着きたるを見て、尊の歌へる歌

久○方○の○天○の○香○具○山○、利○鎌○に○さ○わ○た○る○杙○。ひ○は○ぼ○そ○、た○わ○や○腕○を○、纏○か○ん○と○
は○吾○れ○は○す○れ○ど○、さ○寝○ん○と○は○吾○れ○は○思○へ○ど○。汝○が○着○せ○る○襲○衣○の○裾○に○月○立○ち○
に○け○り○。(景行紀)

比佐迦多能、阿米能迦具夜麻、斗迦麻邇、佐和多流久毘、比波煩曾、多和夜賀比那袁、麻迦牟登波、阿禮波須禮杵、佐泥牟登波、阿禮波意母閉杵、

那賀那勢流、意須比能須蘇爾、都紀多知邇那理

此の宮簀媛は日本紀には尾張氏の女としてあり、又寛平縁起には愛知郡水上邑武稻種公の妹と見えてゐる。○久方は天の枕詞である。○天の香具山は大和の國にある。○利鎌にさ渡る杙……は利鎌の刃に觸れる木といふ意味である。杙は株のことであつて、木の切株を云ふのであるが、こゝは鎌に觸れると云つたから、杙と續けたので、必らずしも切株のことではない。木の意味である○ひはぼそ、は繊細の意で、其の木のしなくと撓みて細いのを云ふ。初めからこゝまでの言葉は次ぎのたわや腕といふ言葉を歌ひ出さん爲めの序である。○たわや腕を……はその香具山の利鎌に觸れる細木の如くしなやかに撓やかな腕といふ意である。たわや女、たわたわなども皆同じ意味で、語源は「撓む」から出てゐるのである。女は弱々と撓み易い身體をしてゐるから云つたのである。○纏かんとは吾れは思へど……、その柔かに細い腕を纏き寝ようと思ふけれども、○汝が着せる襲衣の裾に……はお前の着て

ある上衣うわぎの裾すそに。○月立ちにけり……は月經つぎのちが着きいてゐるので其の時期になつてゐることを知つて尊が婉曲わんきよくに月立ちにけりと歌つたのである。年の來ることを年立つと云ひ、月の來ることを月立つと云ふ。月經つぎのちは一月に一度づゝ來るものであるから其の時期になつてゐることを月立ちにけりと云つたのである。その夜あだかもそれに廻り合せたので、尊は思ひ設けて來たのにもかゝはず、非常に落膽らくたんせられて斯う云はれたものと見える。

一篇の意は、故郷の大和なる天の香具山かぐやまに生へてゐて山賤やまぢの利鎌りかまに刈られるあのしなやかな細木のやうな柔かい汝なまの腕うでを、今宵こそ纏まときつゝ寝ねようと思つて來たのに、あゝあやにくと、汝なまの上衣うわぎの裾すそに月經つぎのちが着きいてゐる……。此の月立ちにけりに就ついては、猶異説なほいせつがあつて、それは月經つぎのちの事ことでないないと云つてゐる人もある。宣長の如ごときは月經つぎのち説せつであり、守部の如ごときはさうで無く、之れは尊が旅をして幾日も幾月も日數ひかずを経たので、そこで月經つぎのちにけりと云つたのだ、あゝ久し振りである……と云ふ

位ゐの意にとるのがよいと云つてゐる。参考までに記しておく。

○

こゝに宮簀媛答へ給へる歌

高たか光みつる日ひの御み子こ、やすみしし我わがが大おほ君きみ、新あらた玉たまの年としが來き經よれば、新あらた玉たまの月つきは來き經よく、うべなく君きみ待まちちがたに、我わがが着きせる襲ぬす衣すゐの裾すそに月つき立たたなんよ

(景行紀)

多迦比迦流、比能美古、夜須美斯志、和賀意富岐美、阿良多麻能登斯賀岐
布禮婆、阿良多麻能都紀波岐閉由久、宇倍那宇倍那岐美麻知賀多爾、和賀
祁勢流、意須比能須蘇爾、都紀多々那牟余

○高たか光みつる日ひの御み子こ、……之れは日本武尊を尊んで云つた言葉である。○やすみしし……は安見ししの意味で、うら安く此の國を治め給ふ大王おほなみであると云つて、之れも日本武尊を尊んだのである。○新玉の年が來經れば……新玉はあらたま、即ち改

間の意であつて、年月の改まりゆくことから其の枕詞となつたのである。年が來ればは年が來ればの意、○月は消經ゆく……は月も經てゆくといふ意、つまりこの意は年が來れば月も經てゆく月が經れば年も經てゆくので、年月は自然に經過して行くものであるから人やりの如何ともすべきことでないとの意である。○うべなく君待ちがたには、諾、諾である、俗にほんにくといふ位ゐの言葉である君の歸るを待つたがもう待ちかねて……。○我が着せる襲衣の裾に月經たなんよ……は我が着てゐる上衣の裾に月經も見えるやうになつたのだ……。早く御歸りになればよいのにあまり遅いので、もう待ち難くて、これこのやうに月經にもなつたのであるわよ……の意、

一篇の意は、高光る日の御子なるわが尊よ、此の國をうら安く治め給ふなるわが尊よ、年が來れば自然に月も來る。——日月の移りゆくのは止むを得ない事であるほんにく君の御歸りになるのが遅かつたことかな。それ故にもうその日を待ちかねて、

ねて、我が上衣の裾に月經が見えるやうになつた。やるせない事であるわい……。

○

尊、それより近江に出で伊吹山の荒ぶる神を征伐に行きましたつるに、その神の氣に觸れて禍を得たまひぬ。即ち伊勢の尾津の濱に到る。嘗て東向の目、その濱の松蔭に劍を解きて置かせ給へるが、今もそのまゝに存在れり。尊歌ひて曰く

尾張に直に向へる一つ松、あはれ一つ松人にありせば、衣着せましを太刀佩けましを (景行紀)

烏波利珥、多陀珥務伽弊流、比苔菟摩津阿波例、比等菟摩菟、比苔珥阿利勢摩、岐農岐勢摩之場、多智波開摩之場

○尾張に直に向へる……は尾張の方へ真直ぐに向つて立つてゐる一つ松よの意、こゝに尾張に向ふと云つたのは彼の宮簀媛のことを思ひ出したのである。○一つ松人にありせば……はあゝその一つ松が人であつたらば、○衣着せましを太刀佩けま

しを……衣物も着せよう、太刀も佩かせように人でないのが恨めしい。

一首の意は、あの思ひ出の多い尾張の方へ眞直ぐに向いて立つてゐるこの一つ松よ、あゝこの一つ松がもし人であつたらば、衣物も着せように、太刀も佩かせように、人でないのが恨めしい……と。その松の木蔭に嘗て置いて行つた劍がそのまゝにあるのを見られて、そとろに往時が懐かしく、その木やその劍に對して今更のやうに感慨を禁じられなかつたのである。で此の歌の裏面にはその松の木が宛もその劍を護つてゐて呉れたやうな心持ちがこもつてゐるのである。それ故にその松が生ける人のやうに懐かしく思へたのである。あはれ一つ松人にありせば……の一句は實にその感慨の流露なされたもので、尊の御病氣になられた際と云ひ、その情も一層切實に表はされてゐる。誠に秀ぐれた御歌である。

○

尊は、病ひの身を以てやがて能獲野といふ處に到りましたぬ 故郷(大和)を思ひ給ふ情に耐へず、

即ち歌ひ給ふ

はしけやし我家の方よ雲居立ち來も、大和は國のまほらま、壘なづく青垣山、こもれる大和し美はし。命のまだけん人は、壘薦平群の山の、くま控が葉を、警華に挿せその子。(古事記)

波斯那夜斯、和岐幣能迦多用、久毛韋多知久母、夜麻登波、久邇能麻本呂婆、多々那豆久、阿袁加岐夜麻基母禮流、夜麻登志宇流波斯、伊能知能、麻多那牟比登波、多々美許母、弊具理能夜麻能、久麻加志賀波袁、宇受爾佐勢曾能古

○はしけやし……は愛しけやしである。好み愛する意で、つまり愛で懐かしむ意味である。○我家の方よ……は我が故郷の方よりの意である。よはよりと同じで、又ゆとも云つてある。○雲居立ち來も……は雲が叢がり起こつて來るといふ意味、○大和は國のまほらま……は大和は國のまほらであるの意、まほらのまは眞で、發

語である。ほらは空虚の意である、大和は羣山に圍まれて中央の地形が自然に空虚を爲してゐるから云つたのである。凡て物に圍まれて奥まり廣まりたる處を云ふのである。ほら穴、ほら貝など皆その心である。○疊なづく青垣山……はたなはりつきの意で、山が重なり合つてゐるのである。青垣山は青々と草木が茂つてゐる山のことである。○こもれる大和し美はし……は、その青々とした山にこもり隠れてゐる故郷の大和は美はしい處であるの意、○命のまたけん人は……命のまつたくあらん人はの意で、まつたくは健全の意である。つまり今の自分のやうに病氣にもならず、命の丈夫の人たちはの意で、その人達とはやがて尊に現在扈從してゐる從者をさして宣はせるのである。○疊薦平群の山の……疊薦はへぐり(平群)と云はん爲めの序である。疊や薦を織るには綜括りつゝ織るものであるから斯う云つたのである。平群の山は大和の生駒山の近くにある○くま櫛が葉を髻華に挿せその子……はその平群の山のくま櫛の葉を折つて汝等(從者を指す)の簪にさせとの意である。髻華は

上代の人々の頭髮に挿した簪のことである。その子とは從者の人々を指して云つたのだ。くま櫛のくまは隠る意である葉の繁りこもりたる櫛である。

一篇の意は、懐かしい我が故郷の空から、あれあのやうに雲の起こつて來るのが見える。我が故郷の大和こそは青々とした山が四方を圍んで、その中に奥まりこもつてゐる美はしい國である——あゝその大和が戀しくなつかしい、もう自分は病に囚はれて、そこに歸り行くことも出來ないであらうが——汝等命の丈夫なものは早く歸つて行つて、あの大和の平群の山に攀ぢ登り、あのくま櫛の葉を折り取つて、汝等の髪にかざして各遊び樂しめ、そこにゐる我が從者達よ……。

○ 尊病いよく重りたまひぬ。即ち歎ひませる歌

をとめの床の邊にわが置きし劍の太刀、その大刀はや (古事記)

袁登賣能、登許能辨爾、和賀淤岐斯、都流岐能多知、曾能多知波夜

日本武尊が東北の征途より歸りて、伊勢の宮簀媛の家に來られたことは既に説いて置いた。媛の家を立たれて近江の伊吹山に荒ぶる神を征伐に向はれた時に、尊は媛の家に草薙劍を置いて出で行かれたので、もし尊が、その時に此の劍を持つて行かれたならば、荒ぶる神の毒氣も受けず病にも罹らなかつたであらうに、返すくも惜しいことであつた。今尊の病が重くなり、命も危ふくなつたので、こゝに尊はその太刀のことを思ひ出して嘆かれるのである。○をとめの床の邊……は宮簀媛の床の邊に……。○わが置きし劍の太刀……は我が遺して來たあの草薙の太刀の意。○その太刀はや……は其の太刀のことを二度繰り返して悲しく思はれるのである。一首の意は、あゝあの尾張の宮簀媛の家の床の邊に、わが遺しておいて來たあの劍よ、あの劍が思ひ出されてならない……。尊は此の歌を歌ひ終へて御崩れになつたのである。時に御年は三十であらせられた。

尊すでに崩れましぬ。こゝに於て大和に坐します妃等御子等諸の人々下り來まして、その並附田に御陵を作り、そこに匍ひもとほり哭き給へり。その時人々の歌へる歌

なづきの田の稻幹に稻幹に、
匍ひもとほらふ藓蔓（古事記）

那豆岐能多能、伊那賀良邇、伊那賀良爾、波比母登富呂布、登許呂豆良

○なづきの田……並附といふのはその御陵を作つた近傍の田の地名である。○稻幹は稻稈のことである。刈つた稻の稈では無くまだ田に立つてゐる稻の莖である。○匍ひもとほらふ藓蔓……は、その稻稈に藓蔓が這ひ懸かつてゐるのを見たのである。もとほらふは這ひ廻ることを云ふのだ。又藓蔓はところといふ蔓草である、つるはつらと同音で通つたのである。

一首の意は、なづきの田の稻稈に這ひ廻り纏はり附いてゐるそのところ、蔓のやうに、今こゝへ來て御陵の邊りを這ひめぐり徘徊うて哭きかなしんでゐるが、もう尊は此の世の方では無い、何事も宣らし遊ばさないのが悲しい……。此の歌以下四首

は明治天皇御葬送の際挽歌として歌はしめられたものである。

○ やがて尊は八尋白千鳥と化りて天に翔けり、濱をさして飛び行きぬ。妃きさひ等ら小竹こたけの刈かり杖づえに足の傷くをも忘れつゝ哭く。其の後を追ひ行きぬ。此の時人々の歌へる歌

○あさ小竹原こたけはらこしなづむ、空は行かず、足あしよ行くな (古事記)

阿佐士怒波良、許斯那豆牟、蘇良波由賀受、阿斯用由久那、

○あさしぬはら……は浅いしぬの原のことでしぬは小竹である。○こしなづむ……は腰なづむの意で、竹が腰を没して踏み分けなやむ意である。○空は行かず……は、尊は白千鳥となつて空を翔け行くけれども、自分達は空を翔けることも出来なから悲しいとの意、○足よ行くな……は徒歩で歩行あゆいて行くことかまあ……との意、このなは感嘆詞のなである。

一首の意は、尊の化身であるその白鳥に追ひ付かうと駆けては来たが、道も無い

野原のまして篠や小笹に腰が埋められて踏み分けがたく、もう追ひ付くことも出来ないので、尊は大空を翔けて行くのであるが、自分等は徒歩で歩行あゆいて行かねばならぬ。あゝもう追ひつけぬか……。その際の悲しさと慌しさとが短い文字の中に充實されてゐる。餘情の多い歌である。

○

人々さらに白千鳥の後を追ひ追ひて海に出づ、潮うしほに入りてなづみつゝ行きぬ。その時人々の歌へる歌

海うみが行けば腰こしなづむ、大河原おほのくはらのうゑ草、海うみがはいよよふ (古事記)

宇美賀由氣婆、許斯那豆牟、意富迦波良能、宇惠具佐、宇美賀波伊佐用布

○海が行けば……は海を行けばの意、海うみがのがは國くにがのがと同じ意であつて、此のくにがが約つてまつて陸くはとなつたのである。うみが、くにが、ともに海、陸の義である。○大河原のうゑ草……は海うみの洲すまに近い處の河のやうになつてゐる處を云つたの

だ。うゑ草は、植草の意でその海の水に生へてゐる海草を云つたのである。○海がはらよふよふ……は海は歩行も難澁で行きも得ず停滯するの意、この海かも前の海がと同じ意に取るべきである。

一首、意は、海を行けば海の水が腰を没して行くことも出来ない。そこの河洲に生へてゐる海草の水にゆられていざよふやうに、自分等も此の海路は行きなやむわす……。之れも前の歌と同じく眼前の景物を捕へて、その際の感情を述べてゐる

○

白千鳥はまた飛びて磯の方に行き行けりその時人々の歌へる歌

濱つ千鳥、濱よは行かず、磯傳ふ。(古事記)

波麻都知登理、波麻用波由迦受、伊蘇豆多布

○濱つ千鳥……はその尊の化身たる白千鳥を云つたのだ。○濱よは行かず……は濱をば行かずして……○磯づたふ……海近い磯から磯へと傳つて飛んで行くとの

意。

一首の意は、あれあの濱千鳥(尊の化身)は岡の濱邊を翔ければ追ひつく術もあるのに、濱をば翔けないで、意地悪くも海近い磯から磯へと翔けて行くあれあのやうに……。

○

神功皇后時代の歌 (稚櫻宮朝)

皇后の舞政元年三月、忍熊王の亂あり。依つて武内宿禰等に命じて之れを宇治に伐たしむ
その時忍熊王の軍中に熊凝といふ勇者あり、兵卒を鼓舞せんとし歌ひたる歌

遠方のあら、松原、松原に渡り行きて、櫓弓に鉛矢をたぐへ、貴人は貴人
どち、奴兒はも奴兒どち、いざ會はな我れは、魂きはる内の朝臣が、腹内
は砂石あれや、いざ會はな我れは。(神功紀)

烏智箇多能阿羅々摩菟麼邏、摩菟麼邏珥和多利喻祇且、菟區喻彌珥末利椰

塙多俱陪、宇摩比等破、宇摩臂苔奴知、野伊徒姑幡茂、伊徒姑奴池、伊弉
阿波那和例波、多摩岐波屢、干池能阿曾餓、波邏濃知波、異佐誤阿例椰、
伊弉阿波那和例破。

○をち方のあら、松原……の、をち方は山城國宇治の遠方といふ土地のことである。あら、松原は、荒々松原をあら、松原と略して云つたのである。荒々とはまばらに生へてゐる松原である。即ち疎林を爲せる松原を云ふのである。○槻弓……は槻の木にて造つた弓を云ふのである。銛矢をたぐへ……は銛の矢をその槻弓につがへたのである。もりのもがまと同音であるから通つてまるとなつたのである。○貴人は貴人どち……貴人とは今の言葉で云へば縉紳、君子、良家の人などを云ふのである。萬葉集などにもうまなさびて、……など、云つてある。即ち上流の人々を云ふのである。○うまびどちは貴人どちの意味である。どしは元來どちと云ふべきであるが、ちとしとは矢張り同列の音であるから通つたのである。○奴兒は奴兒ど

ち……之れも前の句と對句になつてゐるので、之れは貴人に對して下賤の者を云つたのである。つまり貴人は貴人同士、下賤の者は下賤者同士の意である。○いざ會はな我れは……はいざ我れは戰はんとの意である。會ふと云ふことは昔から合戰の意に使つた場合が多い。○魂きはる内の……魂きはるうちの枕詞である。内は朝廷を云ふのである。魂きはると云ふ言葉は魂極まるの意味であると云ふ人もあり、また魂來經るの意味であるとも云つてゐる。うちは現の意味から來たのであるから、此の事から考へて來ると、魂來經るの意味であらうと思ふ。何故かと云ふに、魂が來經る間が現心のある時であるからである。つまり生命ある時である。魂が消え行けば現心が亡くなつて死んでしまふのである。魂きはる命と云ふ場合もある。しかし爰ではうちは現の意味では無くして、内の意味である。現の音と内の音とは似通つてゐるから内へ轉用したので、枕詞には此の種類の使用が多い。○朝臣がは朝臣がと同じである。あそみは又あそんである。あそみは吾兒臣であつて、それが約ま

つてあそみとなつたのである。吾が兄の如き臣との意で、崇敬親愛して云つた言葉である。○腹内は砂石あれや……は、腹内に砂石が入つて居らうや居るまいとの反語である。砂石は矢の通らぬものなれば斯う云つたのである。よしや内の朝臣たる武内宿禰であらうとも、その腹は金石であるまいとの意、○さあ會はな我れは……さあ戦はう我れはと勇みて競ひ立つ有様である。

一篇の意は、彼の武内宿禰等の陣を取つてゐる遠方附近のあのまばらな松原へ渡つて行つて、この槻弓に矢をつがへ、貴人は貴人同士、奴僕は奴僕同士、互ひに會戦して勝負を決しよう。いかに朝廷の朝臣たる武内宿禰が強勢、あらうとも、その腹は鐵石では無いであらう。さあ我れは會戦しよう……とその熊凝が勇ましく歌つて、自分の軍隊を鼓舞激勵したのである。

○

此の時武内宿禰精兵を出して忍熊の軍を追ひぬ。逢坂山にて兩軍互ひに合戦せり。忍熊王利

あらず逃れて入る所なし、王依つて首將五十狹茅宿禰を呼びたまへる時の歌

いよ吾君、五十狹茅宿禰、魂きはる内の朝臣が頭槌の痛手負はすは、鴉鳥の潜させな吾 (神功紀)

伊装阿藝、伊佐智須區禰、多摩枳波屢、干知能阿會餓、句夫菟智能、伊多且於破孺破、珥倍迺利能、个豆岐齊奈、

○いよ吾君……はさあわが首將たる五十狹茅宿禰よの意である。○たまきはる内の朝臣が……は前に述べた通りである。○頭槌も前に神武帝の條に述べて置いた、石槌の太刀頭槌の太刀など、云つて、太刀の銳利にして堅固なるを形容して頭、石等の言葉を添へたのである。○痛手負はすは……は痛手を負うたはの意で、このは文字は感嘆詞である。鴉鳥の潜させな……の鴉鳥は水鳥の名である。水鳥はよく水をくぐるものであるから潜くと云つたのである。潜くは水にもぐる意である。

一篇の意は、さあわが首將たる五十狹茅宿禰の君よ、もう此の通り戦ひも利あら

ずして、我が身は彼の朝廷の朝臣たる武内宿禰の頭槌の太刀のために重い痛手を負うてしまった。生なまなか中生なまなか生きてゐて捕とらへられるよりは、あの鴉鳥のやうに水を潜ひそつて死んでしまはうわいあゝもう逃れる術も無い自分である……と最後いよいよの際の感慨を歌つたのである。爰の水は、即ち近江の湖水を云のたのである。一體鴉鳥は近江の湖の枕詞になつて居る。鴉鳥の近江の湖、鴉鳥の近江など、連ねた例は澤山ある。で或る學者は此の歌の鴉鳥の次ぎに「近江のうみに」の一句を挿入して此の歌を解するやうに述べてゐるが、それを入れる必要は無いと自分は考へる、つまり茲は鴉鳥の如く水に入つて死なうとの意であつて、近江の湖の枕詞として使つたものでは無いと思ふからである。會戦の場所が湖邊であつたから、その眼前の水鳥を持つて來てあの鳥の如く水に沈まうと歌はれたのである。

○

斯くてともに瀨田せたの渡わたりに沈みて死にぬ。武内宿禰依つて歌ひて曰く

近江のみ、瀨田の渡りにかづく鳥、眼にし見えねば憤ほろしも(古事記)

阿布瀨能瀨、齊多能和多利珥、伽豆區菩利、梅珥志瀨曳泥麼、異積迺倍呂之茂、

○近江のみ瀨田の渡り……は、近江のうみの瀨田の渡しである。昔はまだ橋が無くて、その邊は渡しであつたと見える。○眼にし見えねば……はその近江の海に沈んだ敵の屍を探さうと思ふけれども、見つからないのである。○憤ほろしも……は無念に耐へない意味である。も、は感嘆詞である。

一首の意は、近江の湖の瀨田の渡しに沈んだあの鴉鳥のやうな敵の屍骸よ、どう探しても見つからないのが、無念に耐へない……。

○

後數日を経て、屍は宇治の邊りに出でたり、武内宿禰又歌つて曰く

あふみのうみ、瀨田の渡りにかづくとり、田上過ぎて宇治に捕へつ(古事記)

阿布瀨能瀨、齊多能多利珥、个豆區苔利、多那伽瀨須疑氏、干施珥等遷倍菟

○近江の湖瀨田の渡りにかづくとり……は前の歌に述べた處で了解されるであらう。田上たまがみ過ぎて……田上は川の名である。田上川は宇治川の上流を云ふのである。過ぎてはその田上川を越してずつと下流といふ意で。宇治に捕へつ……は宇治は地名である宇治川がそこを流れてゐるのである。宇治川はその源を近江の湖に發してゐるのであるから、その屍——忍熊王と五十狹茅宿禰との屍骸——が宇治に流れて來たのである。捕へつ……は手に入つたとの意味である。

一首の意は、近江の湖の瀨田の渡しに身を沈めたあの鴉鳥のやうな敵の屍は田上川の下流の宇治の邊りで、やうやく捕へることが出来た……。

○

神功皇后の十三年二月武内宿禰をして太子譽田別皇子に隨ひて角鹿の氣比神社を拜せしむ。

太子角鹿より歸りきましし日、神功皇后宴を大殿に開き、船ふねを擧げて太子の壽を祝し、依つ

て歌ひませる歌

この神酒はわが神酒ならず、薬くすりの神常世とこよにおます、岩いわたたす、少すくな御神の、
豊とよ祝いぎ祝いぎもとほし、神祝かみぎ祝いぎくるほし、献まり來きし神酒ぞ、餘あまさず食をせ

よれ (神功紀)

虚能彌企波、和餓彌企那邏孺、區之能伽瀨等虚豫爾伊摩輸、伊波多多須、

周玖那瀨伽未能、等豫保枳保枳茂苔保之、訶武保枳保枳玖流保之、摩菟利

虚辭彌企層、阿佐孺鳩齊佐佐、

之れは譽田別皇子(應神天皇)が越前の角鹿(敦賀)に參詣して歸りたる日、大殿にて宴を開かせ、その席にて皇后の詠まれたもので、その當時の饗宴の有様が眼に見えるやうである。○この神酒はわが神酒ならず……は此の酒は自分の醸した酒では無し。○薬くすりの神……は薬の神である。薬は萬病を癒いす奇くしきものであるから薬をくすりと云つたのである。○常世とこよにいます……は少彦名神は神代紀に熊野より常世

郷に行くところある通り、海を越えて和田津海の郷に行つてしまはれた神であるから斯う云つたのである。○岩たゝす……はその少彦名神は常世に行つてから後、石に像を刻まれて諸國の路傍、又は神社などに立てられてある。大和には「天の岩たゝす神……」などといふ神社もある。少彦名神を云ふたのである。少彦名神は大物主神とともに此の國土に種々の物を造り成した神である。○豊祝ぎもとほし……の豊は賞美の言葉である。祝ぎもとほしは、祝ぎ廻らすの意で、つまり祝ひかへすことである。くりかへしく祝ひつゝ造つた酒であるとの意である。○神祝ぎ祝ぎくるほし……もそれと同じ言葉である。神は崇敬の言葉である。祝ぎくるほしは矢張り祝ひ返へすことで、くりかへしく祝ひ造つた酒との意である。○献。來し酒ぞ……はさう云ふ様に懇に造つて、今こゝへ太子の御前へ献じた酒であるとの意、○あさず食せさゝ……のあさずは餘まざるの意、食せは飲りなされませとの意、さゝはいさゝの略された言葉である。

一篇の意は、此の酒は私の醸み成した酒ではない。太子の壽命を祝ひ奉るためにあの薬を掌る神である處の、あの今も岩に姿を遺して諸方に立つてゐる處の、少彦名の神が懇に心を悉くして、繰り返し祝ひつゝ醸して、今こゝに斯うして献るのであるから、一滴も餘まざる召し上がり成されませ、いさゝく……。此の歌を見ても酒は上代から壽命の薬としてあつたことが了解されるのである。さうしてその酒を太子に献じて太子の壽を祝する皇后の熱意と喜ばしさが、一篇のうちに溢れてゐる。

○ 武内宿禰依つて太子の爲めに答へて歌へる歌

此の御酒を醸みけん人は、その鼓臼に立てゝ、歌ひつゝ醸みけめかも、此の御酒のあやに宴樂し、おほひ

許能彌企塙、伽彌鷄武比等破、曾能菟豆彌干輪爾多氏干多比菟菟、伽彌

鷄梅伽慕、許能彌企能、阿都邇干多娜濃芝、作沙、

○此の御酒……は今太子譽田別皇子の壽を祝ふために酌みかはしてゐる此の饗宴の席にて飲んでゐる酒を指すのである。○醸みけん人は……は、この美はしい酒を醸もし作つた人はとの意である。○その鼓臼に立て……は、上代酒を作るには、鼓を打ち、歌を唄つて醸もしたものと見える。で……もこの酒を醸もした人達は、その酒を醸もす臼の上に鼓を立て、美しい酒の出来るやうにと、歌ひはやし乍ら醸もしたのであらうとの意、○この御酒のあやに宴樂し、……のあやと云ふ言葉は樂しに附く副詞であつて、怪しくふしぎにもといふ意味を有つてゐる。宴樂し……はこの宴の楽しいことよの意、○さ……は前の歌にも述べた通りで、いざいざと酒を進める言葉の略されたものである。

一篇の意は、この饗宴に今人々と飲んでゐるこの御酒を醸んだ人は、大方喜びに胸も躍りつゝ、鼓をあの醸み臼の上に立てながら歌ひはやし舞ひ踊つて、この酒を

作つたのであらう。あやしくもこの酒宴の楽しいことよ、いざいざ澤山に飲めとの意である。

○ 應神時代の歌 (明宮朝)

○ 應神天皇の六年春二月、天皇近江國に行幸し、菟道野の邊りに至りまして歌ひたまへる歌

○ ち○ば○の○葛○野○を○見○れ○ば○、○百○千○足○家○庭○も○見○ゆ○、○國○の○秀○も○見○ゆ○ (古事記)

知婆能、伽豆怒塙彌例麼、茂茂智多蘆、夜珥波母彌喩區珥能朋母彌喩

この御歌は、應神天皇が菟道野にいでまして、その野邊の邊りが、今しも開拓されつゝ一日一日と家數が満ち足らひ行く有様を御覽になつて詠まれたのである。○ちばはとばの轉じたもので、やがて鳥羽の地を指すのである。つまり鳥羽の葛野といふべきである。鳥羽も葛野も皆山城の地名であつて、宇治野の中にあるのである

○百千足……は百千と多くの数の満ち／＼てゐるのを云つたものである。○家庭は今の言葉で云へば屋敷である。○國の秀も見ゆ……の秀といふのは凡て物の上に立ち表はれた處を云ふのである。稻の穂、火の穂、上枝などその例である。こゝも國土は遠白く浮き上がつて眼につく有様を云つたのである。菟道野から國見をなされたその際、御眼の前に見える野邊の光景である。

一首の意は、今菟道野に来て鳥羽の葛野を見渡すと、こゝかしこと數多く人の住む屋敷の殖えて行くのも見え、また肥えて豊かな野邊があれあのやうに浮き上がつて見える……。古代の皇都附近の野原がだん／＼開拓されつゝ、人家も出来れば、交通も營まれて行く草創の時代の俤がこの一首に依つて窺はれるのである。

○

行き／＼て木幡村に到りませる時美はしき少女とその巷に逃ひぬ。天皇その名を問ひ給へば矢河姫なりと答ふ。依つて明日還りまさん時少女の家に入らんことを約す。姫之れを父に告げ

たるに、かしこし、そは天皇なり。汝奉仕せよとて、その家を飾りて待ち奉るうちに、やがて明くる日入りましぬ。その時天皇姫に大御盃を取らしめながら歌ひたまへる歌

この蟹やいづくの蟹、もづたふ角鹿の蟹、横去らふいづくに至る。市路島三島にと來、鴉鳥のかづき息づき、級だゆふさなみ路を、すく／＼と我が行ませばや木幡の道に逢はし、少女、後手は小楯もかも、齒列は推しなす、櫟井の鰐坂の土を、初土は肌赤らけみ、終土は丹黒きゆる、三つ栗のその中つ土を、頭つく眞日にはあてず、眉描き濃に描き垂れ、逢はし、女、斯もがと我が見し子等、斯くもがと我が見し子に、宴酣だに對ひ居るかも、い添ひ居るかも。(古事記)

許能迦邇夜、伊豆久能迦邇、毛毛豆多布、都奴賀能迦邇、余許佐良布、伊豆久邇伊多流、伊知遲志麻、美志麻邇斗岐、邇本梯理能、迦豆伎伊岐豆岐志那陀由布、佐佐那美遲衰、酒久酒久登、和賀伊麻勢婆夜、許波多能美知

邇、阿波志斯袁登賣、宇斯呂傳波、袁陀且呂迦母、波那美波志比斯那須、伊知比韋能、和邇佐介能邇袁、波都邇波、波陀阿可良氣美、志波邇波、邇具漏岐由惠、美都具理能、曾能那迦都邇袁、加夫都久麻肥邇波阿且受、麻用賀岐、許邇加岐多禮、阿波志斯袁美那、迦母賀登、和賀美斯古良、迦久母賀登、阿賀美斯古邇、宇多多氣陀邇、牟迦比袁流迦母、伊蘇比袁流迦母

この蟹や……とはその宴の席の御膳部に折から蟹の料理したのが供へられてあつたのを、即興的に御歌に入れられたものである。○百づたふ……は幾百里かの遠い處を経て來た意である。津、道などの枕詞である。○角鹿は前にも出てゐた越前の敦賀の海のことである。○横去らふ何處に至る……の横去らふは蟹の歩み方を云はれたのである。横去りつゝ何處に行くのだとその蟹へ問ひを掛けられたのである。○市路島三島にと來……はその問ひに自ら答へられた言葉である。共に地名である。

○鴉鳥のかづき息づき……は鴉鳥は前の武内宿禰の條に出てゐた言葉である。鴉は水中にもぐり入る鳥だからかづきと云つたのである。かづきは潜きである。息づきは鴉鳥が水をもぐりつゝ息も忙しげなる有様を云ふのである。然かもこの言葉はやがて今の今天皇御自身が近江湖畔の道を息も忙しげに歩いて來られたその心持に寄せて云はれた言葉である。○級だゆふ……の級は坂のんだらに傾斜したのをいふのである。階級をしなとも云ふ、又坂道の多い國を級坂の國とも云ふ。科野などはその例である。だゆふ……は撓むの意で、級坂の撓むとは一度登つた坂が又撓むやうに降りになり、そして又登り又降るやうなのを云ふのである。○さ々なみ路……は近江の湖邊の路を云ふのである。○すく／＼と我が行ませばや……は躊躇ふことなく一筋に行くの意である。○木幡の道に逢はし、少女……の木幡は山城の地名で近江への交通路に當つてゐる。逢はし、少女は、逢つた少女を指したのである。○後手……は面手と對の言葉で……つまり後姿を云ふのである。○小楯ろかも……は

楯のやうにその脊がすらりとしてゐたから云つたのである。る文字は等の變じたのだと古人は解釋してゐる。つまり小楯等かもの意で、小楯などのやうであるかまあの心である。○齒列は椎しなす……は齒並びは椎の實を並べたやうであるとの意、なすは如くの意である。○櫟井の鰐坂の土……の櫟井は大和の地名である。鰐坂もその近傍の地名である。土とは土のことである。青土赤土などその色に依つて云ふのである。古代の繪の具の料は皆土から取つたのである。丹といふのもやがて赤土から出た言葉である。猶こゝでは斯う云ふよい色の土を取つて姫の黛を描いたのである。○初土は肌赤らけみ……はその鰐坂の土を掘るのに一番掘り初めの處の土を云ふのである。そこは土の外皮であるから土が赤くて青い黛を描くには適しないと云ふのである。○終土は丹黒き故……も前と同じて掘つた最後の處の土は土深い故色が赤黒くてこれも黛に不適當なのである。○三つ栗のその中つ土……とは栗は多く三つ實があるものであるから、その三つのうちの中といふ意味から中の枕詞にな

つたのである。その最初の土でも、最終の土でも無く、その真中の色の良い土を取つての意である。○頭つく眞日にはあてず……の頭つく頭を刺撃するやうな日に當てずとの意で、つまり頭のかん／＼するやうな烈しい日光には觸れずにの意である。黛の土は柔かい日で乾かさなければいけないのである。○眉描き濃に描き垂れ……は黛を濃く描き垂れるのを云ふのである。眉は蛾の眉のやうに尻がなだらかに垂れるやうに書くのがよいのである。逢はしゝ女は、あの湖邊の道に出逢つた少女をいふのである。○斯もがと我が見し子等、斯くもがと我が見し子に……は對句である。その逢つた少女が自分の召しに應じたならば斯うもしよう、あゝもして見度いと思つたのである。もがといふ助辭は希望の意を有つた言葉である。○宴酣だに對ひ居るかも、い添ひゐるかも……は此の饗宴の酣なる間だけでも、斯うやつて楽しく對座して一緒に添つてゐるのがうれしいとの御意である。

○一篇の意は、今此の饗宴の膳部に供へてある蟹は何處の蟹であるぞ、幾百里かの遠い道を経て来たあの敦賀(角鹿)の蟹である。此の蟹は横に歩みつゝ何處へ行くのであるか、外でも無いこの近江の市路島の三島へと辿り来て、あの湖の水に潛り息づく鴉鳥の如く、(こゝまでの言葉は天皇御自身が一心に道を歩いて來られたことを述べる爲めの序詞である)我が身も息忙しくこゝの湖邊の道をすくゝと歩いて來ると、思ひもかけず木幡の邊で此の美しくい少女に逢つた。まあその少女の後姿はと云へば、すらりとして楯などを立てたやうで、その齒列は椎の實を揃へたやうである。又その面はあの櫟井の里の鰐坂の土の、表面の赤いのもなく、深い處の赤黒いのも無く、その真中の一番美しい土を取つて、強い日にはあてず柔かに乾かして作つた黛で、眉を濃く描き垂れてゐた。あゝその逢つた少女の美しい粧ひであつたことよ。その時からどうか我が手に入れて、あゝもして見たい斯うもして見たいと望んでゐたのに、その少女に今此の饗宴の席で、楽しく酒を酌みかはし、此

の宴の酣になる間だけでも相對して添ひ居るのが嬉しい……。その道行きを詳しく述べられるのに、眼前の蟹を捕へ、猶水鳥の忙しい思ひで歩いたと云ふ形容をせられて居る。のみならず、その一語一語が直感覺の表現で或ひは脊のすらりとしたのをその當時手ならしてゐられた武器の楯にたとへ、又その美しい細かい齒列を椎の實に比せられてゐる處などは、如何に驚くべき御才であるかと察しられる。況んやその黛に就いてこま／＼と行き渡つた描寫をされてゐるのには、如何にも微妙な言葉使ひで感嘆に餘るのである。もしそれ終りの方の「斯もがと我が見し子等」云々に至つては纏綿綢繆の情を極めて、此の天皇の斯かる愛に浴し奉る此の一少女の幸が寧ろ嫉ましいやうな氣がされる。誠に目出度い御作である。

○ 應神天皇日向の國に髮長媛といふ美しき媛のありといふことを聞召して、之れを召し入れたまひぬ。やがて太子大鷦鷯命天皇に請ひ奉りて媛を賜はらんことを願ふ。天皇依りて豊明の

宴の日、媛を太子に賜はらんとし、大御盃を媛に取らしめて歌ひたまへる御歌

いざ子ども、野蒜摘みに蒜つみに、我が行く道の、香はし花橘は、上枝は
鳥居枯らし、下枝は人取り枯らし、三つ栗の中つ枝の、含隠り紅ら少女を
いざさば宜らしな (古事記)

伊耶古梯母、怒毗流都美邇、比流都美邇、和賀由久美知能、迦具波斯、波
那多知婆那波、本都延波、登理韋賀良斯、支豆延波、比登登理賀良斯、美
都具理能那迦都延能、本都毛理、阿迦良袁登賣袁、伊耶佐佐婆、余良斯那、

此の歌の言葉書きのうちに云つてある大鷦鷯の尊とは即ち彼の仁徳天皇の事であ
る。此の歌も初めから終りの「三つ栗の中つ枝……」までは「含隠り紅ら少女……」
と云はん爲めの序詞である。○いざ子ども……とは天皇に従つてゐる従者眷族を云
ふのである。必らずしも子供の意ではない。○野蒜摘みに蒜摘みに……の野蒜は野
に自然に生へてゐる蒜のことである。それを摘みにと従者をつれて行く意である。

○香はし花橘……は香ひよき花橘の意で、橘は今の蜜柑である。○上枝は鳥居枯ら
し……はその橘の上の枝は鳥が来て常にとまるので踏み枯らすのである。下枝は人
取り枯らし……もその對句で下の方の枝は人が折り取つて枯らすのである。○三つ
栗の云々……は前の歌に述べたと同じである。中つ枝は真中の枝である。○含隠り
紅ら少女を……之れは原文では「本都毛理」即ち「ほつもり」となつてゐるがそれ
では意味が通じない。書紀にはこのところが府保語茂理となつてゐて、それならば
「含隠り」でよく意が通じる。今は之れに従つて解いた……橘の木の中程の枝
に咲いてゐる花の中に、まだ幼い實がやはらかに含まれたやうに隠つてゐるのを。
その媛の美しい貌に例へられたのである。○いざさば……は、いざ爲せばの意
で、いざ爲せ給へと、その人を床の中などへ誘ひたてる意味である。それでこゝは
天皇が太子に媛を與へたのであるから、天皇が太子に、いざ／＼と誘ひ立て二人一
緒に手を取り連れ立つたならば嘸似合ふだらうから、疾く／＼誘ひ立て、行けと仰

せられるのである。○宜らしな……は似合ひがよろしいだらうの意である。

一篇の意は、いざ吾が従者だもよ、お前達を連れて野蒜をつみに行くと、その路にふと一本の香はしい橘が花を開いてゐる。その花橘の上の枝は鳥が来て踏み枯らし、その下の枝は人が折り取つて枯らしてしまふが、たゞその中程の一番美しく盛り咲き満ちてゐる花の中にふうはりと含まれたやうに隠つてゐる實のやうに、紅く照り映えてゐる美しい此の媛よ。まあ何といふ可愛らしい子であるぞ、さあ此の媛を汝(太子)に與るから、いざ／＼と手を取つて彼方へ誘ひ立てよ。したらばどんなにか似合ひの宜い夫婦だらうに……。此の歌の中の秀句とも云ふべきはその「含隠り紅ら少女……」の一句である。如何にも花に含まれた紅い實のやうな爛漫たる媛の容貌が思ひ出される言葉である。應神天皇の詩人としての質は此の一句に活躍してゐると云つてもよい。

◎

此の時、天皇又歌ひたまへる御歌

水たまる依網の池の、堰杖打ち河股江の、菱殻の刺しけく知らに、尊凝延
へけく知らに、我が心しぞいや鳥辭にして、今ぞ口惜しき。(古事記)

美豆多麻流、余佐美能伊氣能、韋具比宇知、賀波真多江能、比支賀羅能佐
斯那流斯良邇、奴那波久理、波閉那久斯良邇、和賀許許呂志叙、伊夜袁許
邇斯豆、伊麻叙久夜斯岐

此の御歌は應神天皇が太子と髪長姫との間がいつのまにか好意になつてゐたのも知らずゐたのを口惜しがられて、戯れ言のやうに歌はれたのである。太子が彼の媛を賜はれと願つたことは、天皇に取つては實に突然のことであつたに相違無い。その突然のことに驚かれた御心持ちが此の歌には表はれてゐる。○水たまるとは水の停まる意で、それから池の枕詞となつたのである。○依網の池は攝津の國にある池である。○堰杖打ち……はその池の水を田に引くのに、池の出口へ堰を作りそこ

へ杵を打つて堰の壊れぬやうにするのである。その堰から水をあちこちと分配するのである。○川股江……はその水を分配するので川が幾つにも分れる處をいふのである。此の句は一體依網の池のすぐ次ぎへ續くべきで、川股江といふ言葉とあちこち入れ更へて見ると意味がよく通じる。○菱殻の刺しけく知らに……はその杵を打ちに依網の池へ這入ると、その池の底にあやにく菱が生えてゐて、その菱の實の殻が足を刺すのであるのに、それとも知らないでといふ意である。つまりそのやうに意外にとの意である。○葦凝り延へけく知らに……もそれと對句である。その池の底に葦の根が凝り生へて飛んだ處へ延びて行つてゐるとも知らずにの意で、やはり意外であつた事を表はす言葉である。○我が心鳥辭にして今ぞくやしき……は我が心はそんな意外の事のあるとも知らずにゐたのか、何といふ愚かな笑ふべきことぞ、それが口惜しいとの意である。鳥辭は可笑である。こゝは自分から自分の抜かつてゐたことを嘲られる言葉である。

一篇の意は、あの水の澄つた依網の池の川股になつてゐる處へ堰の杵を打つたために足を踏み入れると、あやにくと、そこは菱が植わつて居り、また葦の根が凝り固まつて生え延びてゐる。そんなものがあらうとも知らずにゐた我が心の愚かさ口惜しい。それと同じく今吾が太子の大鶴命が自分の知らない間にいつしか媛と好意の間になつてゐたのが意外でもあり、又自分にとつても残念なことである。けれども今は汝(太子)の請ひを納れて快く與へるから、さあ誘ひ立て、連れてまわれとの意を言外に諷してゐられるのである。言葉は少いが、意味の長い御歌である。

○

こゝに太子は此の少女を賜はりて後、歌ひたまひて曰く

道の後。木畑をとめを神のごと聞えしかどもあひ枕まく。(古事記)

美知能斯理、古波陀袁登賣袁、迦微能基登岐許延斯加杵母、阿比麻久良麻久、

○道の後の道は東海道東山道など云ふ道のこと、こゝは帝都を本にしての意である。それ故に後(尻)とは京都から尤も奥に當つてゐる邊を云ふので、つまり此の髪長媛の生まれた日向の國を云ふのである。○木畑少女……は、その髪長媛は日向の木畑といふ所に生まれたものと見える。その出身の地名に添へて少女を呼ぶは例ば、彼の香取少女、上總少女、都少女など數多ある。○神のごと……はその媛が日向といふ遠隔の地の出であるから、此の世の人とも思はれ無い意である。かみとは前にも述べた通り幽隠なる處を云ふ言葉である。○聞えしかども……は聞いて居つたがの意である。○あひ枕まく……は一緒に手を纏いて寝るとの意である。枕の語原は纏くるから出てゐる。互ひに手を頸に纏はらせつゝ寝るか云つたのである。一首の意は、あの遠い道の奥の日向の木畑をとめは此の世の人とも思はれないさながら神の如くも聞いてゐたのに、その少女と今は斯うして互ひに手を纏はらせつゝ寝ることの楽しいことよ……。昨日までは父帝の所有で手も觸れることの出来な

かつた少女に、今希望が叶つて相寝ることを得た歡喜の情がその裏の意味になつてゐる。

○

又歌ひたまへる御歌

道の後、木畑少女は争はず寝しをしども愛しみ思ふ (古事記)

美知能斯理、古波陀袁登賣波、阿良蘇波受、泥斯久袁斯叙母、字流波志美
意母布、

争はず寝しをしども……はその日向の少女は他の男即ち自分などは寝ることを拒みはしないかと心配したのに、争ふ景色もなく自分(太子)の意に従つて寝るのが愛らしいとの意である。寝しきのしくは萬葉などにも此の詞が多い、「背向に寝しく今し口惜しも」などの例もある。一つの助辭であるが、寝るに附いて動詞の格になつたのである。只寝ると云ふよりは寝しくと云ふ方が、しめやかに打ち臥す意が

こもつてゐるのだ。或ひは寢繕く(敷く)の意かと思はれる。をしども……は凡て助辭である。寢しくをぞ愛しみ思ふ……と云ふのと同じであつて、し字も字はともに意味を強める爲めの助辭で外に意味があるのではない。○愛しみ思ふ……は可愛ゆく思ふの意である。

一首の意は、道の後の日向の木畑少女は争ひもせず、自分の意に従つて一緒に斯うして寝るのであるが、それがいよ／＼愛着に耐へない……。

○

吉野の國主とも大鷲鶴命の佩かせる御太刀を見て歌ひける歌

譽田の日の御子、大鷲鶴、大鷲鶴、佩かせる太刀、本つるぎ末ふゆ、冬木のす幹が下木の、さや／＼。(古事記)

本牟多能、比能美古、意富佐邪岐、意富佐邪岐、波加勢流多知、母登都流藝、須惠布由、布由紀能須、加良賀志多紀能、佐夜佐夜、

吉野の國主とはその時代大和の吉野附近に住んでゐた一族の名である。神武紀に磐押別の子、こは吉野の國栖部の先祖なり云々と見えてゐる。今も吉野に國栖といふ部落があるが之れは此の一族の後である。○譽田の日の御子……とは則ち大鷲鶴命(仁徳天皇)のことをいふのである。命は應神天皇の皇子であつて應神天皇の御名は譽田別であるからである。日の御子とは皇子を尊んで云つたのである。○佩かせる太刀……は佩ばせてゐられる太刀の意、○本つるぎ……の本とはその太刀の身といふのである。その身が劔になつてゐるのを云つたのだ。劔は刃が兩方から附いてゐるのである。つまりその太刀の身が兩刃になつてゐて鋭利なのを賞めて云つた言葉である。○末ふゆ……は今の本つるぎに對して云ふのである。末は刃の先端をいふのでそれが冬の如く氷つて光つてゐるとの意味である。冬は語源ひゆから來てゐるのでひゆは又冷ゆ又氷ゆである。○冬木のす……は冬木如すの意で、雪なす肌、雲なす兵士などのなすと同じである。○幹が下木……の幹は凡て草や木の幹をいふ

のである。下木はその幹から葉の落ちてしまつた後の梢を云ふのである。○さやさや……はその葉の落ちつくした梢に冬の霜が氷つて光り輝いてさやかな景色になるのを、命の太刀の鋭利なのに比べて感嘆した言葉である。さや／＼には寒や又牙やの意味が含まれてゐる。

一篇の意は、譽田別の天皇の皇子たる大鶴鶴命（仁徳天皇）の佩びてゐられる太刀の鋭い太刀であることかな、その太刀の身は兩刃で刃尖は氷のやうに光つてゐる。さながら葉を落してしまつたあの冬木の梢が霜に氷つて光るやうに寒え／＼として鋭い太刀である……。幼稚な比喩であるが、その素朴な直覺に古代の人々の心持ちが表はされてゐる。

○

又國主どもは吉野の白檮生に横白を作り、その横白に大御酒を醸みて天皇に献る時口鼓をうちつゝ伎をして歌ひける歌

檮の生に横白を作り、よくすに醸める大御酒、美味らに聞こしもち食せ、まろが父。（古事記）

加志能布邇、余久須袁都久理、余久須邇、迦美斯意富美岐、宇麻良邇、岐許志母知袁勢、麻呂賀知、

吉野の白檮生は地名である。應神天皇が此處へ行幸された時、國主どもが酒を献じて天皇を祝し奉つたのである。又伎をしてと云ふのは、その酒を天皇に献る時天皇を悦ばせようとして、舞をしてその酒を献るのである。今も神樂の舞などにその手振りが遺つてゐる。○檮の生は白檮生と云ふと同じである。○よくす……は横白を約めてよくすと云つたのである。○醸める大御酒……とはその白の中に飯を入れて杵にて春いて酒を醸もしたのである。○美味らに……は今のおいしいの意で、ら文字は添へたのである。清ら、赤ら、など、同じである。○聞こしもち食せ……は聞こし召せと同意で、詳しく云へば聞こしもちとは此の酒を親しく御手に取られて

の意で、食せと云ふ詞が御飲り成されませの意を有つてゐるのである。○まろが父……のまろは吾と同じ意味で、ちは父の略されたものである。つまり我が父とも崇め奉る天皇との意である。この歌は今上天皇の御即位式に歌はれた歌である。
一篇の意は、この吉野の白檮生に横白を作つて、その横白で醸もした此の御酒を、どうぞ御甘しく御召しあがり成されませ、わが父なる君よ。

○

此の御代に新羅の人にて酒を醸むことを知れるもの、名は仁番又の名は須々許理といへるもの
渡り來つ。こゝに此の須々許理大御酒を醸して献りき。天皇此の大御酒に昏酔て歌ひたまへる

歌

須々許理が醸みし御酒に、我れ酔ひにけり。事なぐし、ゑぐしに、我れ酔ひにけり。(古事記)

須須許理賀、迦美斯美岐邇、和禮惠比邇祁理、許登那具志、惠具志爾、和

禮惠比邇祁理、

須々許理は新羅よりの渡來人である。造酒の道に長けたものであつたと見える。天皇は此のものゝ造つた大御酒に昏酔てしまつたのである。その御苦しい有様が呻吟く聲の如く歌はれてゐる。○事なぐし……は言の苦しと同じで、言葉も云へぬほど苦しく酔つたとの意である。○ゑぐしに……も苦しいほど酔つたとの意である。○我れ酔ひにけり……の結辭は如何にも御苦しうな醉言のやう聞こえてその呻吟れる聲そのまゝの心地が取られる言葉である。
一篇の意は、あの異國から渡つて來た酒造りの須々許理の造つた酒を飲んだので自分はもう斯んなに酔うてしまつた。あゝ言葉を云ふにも苦しい。あゝ酔うてしまつた。

○

應神天皇の二十年、天皇難波に幸し大隅の宮に居ます。翌年高臺に登らして國見させける

時、奉侍せる兄媛、故郷の吉備を望み見て、大いに嘆き悲しむ。依つて淡路の海人八十人を召し水夫をして媛を吉備の國に送らせ給ふ。兄媛難波津より船出する時、天皇再び高臺に登りまして媛の船を望みつゝ歌ひたまへる歌

淡路島いや二並び、小豆島いや二並び、よろしき島々誰が離ればか、散らし、吉備なる妹を相見つるもの。(應神紀)

阿波施辭摩、異椰敷多那羅弭、阿豆枳辭摩異椰敷多那羅弭、豫呂辭枳辭摩之魔、儻伽佐加例婆加、阿羅知之、吉備那流伊慕塢、阿比瀨菟流慕能、

大隅の宮とはその當時應神天皇の離宮であつて、攝津の西成郡の大道といふ處に當つてゐると云ふ。又兄媛と云ふは應神天皇の妃で、遠く吉備より入内された方である。天皇の寵を受けたので、他の妃達から嫉まれて、故郷が戀しく成つたもの見える。(淡路島いや二並び……は淡路島のそばに、その當時のころ島と云つた島が並んでゐたので斯う云つたのである。○小豆島いや二並び……もそれと同じ義

で、之れは續日本紀に備前の兒島郡小豆島と云つてある島である。此の島のそばに矢張り兒島と云ふ島があるので、いや二並びと云つたのである。いやは彌の意で、いよくと同じくこゝでは並ぶの副詞になつてゐる。○よろしき島々……とは似合ひの善い島であるとの意、○誰か離ればか……は原文には誰かたされとあつて意味が解されない。之れは古人も云つた通り、何か誤字脱字等の爲めに斯うなつたものと思ふ。橘守部は「誰が避けか」の誤りだらうと云つてゐるが、それよりも「誰が離ればか」の誤つたものとする方が穩當のやうに思ふから、私見にて前掲のやうにしたのである。それで意味はその二つの島々の似合よろしき如く睦ましくしてゐた二人を誰れが離してしまつたのかとの意で、暗に他の妃達の嫉みをほのめかしたのである。○散らし……は、あられ(霞)あら、松原などのあらと同じ義であつて、ちり／＼に別れ別れになる状態を云ふのである。こゝもその意味で二人睦ましくしてゐたのが離散する意味である。○吉備なる妹を相見つるもの……はその吉備の少女

である處の妃と二人たのしく寄りそひつゝ相見てありしものをの意である。

一篇の意は、遠く故郷へ歸さねばならぬ媛の船を送らうと、今此の高臺へ登つて見ると、眼の前には淡路島の二つ並んでゐるのが見え、小豆島の二つ並んでゐるのが如何にも似合よく見える。誰れが中を離すのであるか、斯う自分達二人の間は別れくにならねばならぬとは、あゝ吉備の兄媛と今の今迄むつましく一緒に住んでゐたものを……。餘情の深い詠嘆の心持ちの勝つた御歌である。

○

天皇の三十一年秋八月諸臣に詔して曰はく、官船名を枯野といふは嘗て伊豆より貢れる船なり。今は朽ちて用ふるに堪へざれども、舊功没し難し、いかで此の船の形見を後世に傳へんと。諸臣仍つて此の船材を取つて火に焼き鹽を作らんとす。即ち材を焼きくつて行くに遂に燃えざる所あり。諸臣此の餘燼を奇しみて天皇に獻りたるに、天皇之れを異とし琴を作らしめ給ふ。その音鏗鏘として遠きに響く、此の時天皇歌ひたまひて曰く。

枯野を鹽に焼き、しが餘り琴につくり、搔きひくや由良の門の、門中の巖

に、振れ立つなづの木、さやさや (應神紀)

訶羅怒鳥、之褒珥椰枳之餓阿摩離、虛等珥菟句離訶枳譬句椰、由羅能斗能斗那訶能異句離珥、敷例多菟、那豆能紀能紀、佐椰佐椰

○枯野を鹽に焼き……はその官船の枯野と云ふ船を焼いて鹽を獲らうとしたことをいふのである。○しが餘り琴につくり……のしがはそがと同じである。餘りはその燃え残りの燼を云ふのである。それにて琴を作つたのである。○搔きひくや由良の門の、門中の巖に……はその琴を弾くと由良の水門の海底の巖に波に振へつゝ音を立てゝゐるなづの木のやうに、その琴も好い響きを立てゝ鳴るとの意を述べられたのである。○なづの木……とはどう云ふ木か解されないが、守部は水に浸漬く木の意で、海松のことだと云つてゐる。海松は海底の巖に生へるものであるから、浸漬く木であると解いてゐる。人麿の歌にも「からの崎なる巖にぞ深海松生ふる」と云つてゐる。又なづくを浸漬くと解するのは水になづさふ又波になづさふなどの言

葉と同じで水に浸し漬かつてゐる意味で、つまり漬浸ふ木といふ義だと云つてゐる参考として擧げて置く。○さや／＼はその音の冴え／＼て清いのをいふ詞である。

一篇の意は、官船「枯野」の名残が惜しいので、その船材を焼いて鹽を獲やうとしたが、その焼け餘りの燼を琴に作つて掻き鳴らすと、さながらあの由良の水門の海底の巖に振へつゝ生へてゐる海松が、波に打たれて音を立てるやうに此の琴もさや／＼とよい響きを立てるはい……。此の歌に就いては天皇がその船の名残りを惜しまれて、その船の材を用ひて琴を作られたと云ふ事實がいみじくも有り難い事實である。此の事實そのものが、既に詩歌である。

仁徳時代の歌 (高津宮朝)

○

應神天皇崩れまし給へる後、皇子大鷦鷯命は天皇の命に従ひて御位を菟道稚郎子に譲り給ひ

き。然るに庶兄大山守皇子御位を奪はんとし竊かに稚郎子を殺さんと兵を宇治川の畔に設けぬ。

大鷦鷯命之れを知り使を遣はして稚郎子に告げしめ給ひぬ。稚郎子驚きて兵を河に伏せ、大山

守皇子が將に河を渡らんとする時、その船を傾けしめ水中に陥れて死なしむ。此の時大山守、

水のまに／＼流れつゝ歌へる歌

千早人、宇治の渡りに、棹とりにはやけん人し、我がもこに來む (古事記)

知破椰臂苔、于知能和多利珥、佐鳥刀利珥、破椰鷄務臂苔辭、和餓毛胡珥

虚務。

○千早人は宇治の枕詞である。千早人とはいちはや人の意であつて、いちはや人とは勇威なる人の意である。宇治は氏と同意であつて此の氏とは彼の上代武人の族たる物部氏をさすのであるから、勇威の人なる物部氏といふ意味から氏の同音たる宇治へかゝるやうになつたのである。○宇治の渡りとは宇治の渡しをいふのである今の宇治橋の附近であらうと思ふ。○棹とりにはやけん人し……といふ意味につい

ては種々の説があるが、矢張り之れは船の棹をあやつるに、敏捷なる人は……の意味であらうと思ふのである。○我がもこに來む……のもこは許所のつゞまつたのである。つまり我が許へ助けに來いとの意である。

一篇の意は、宇治川の渡しに自分は今溺れて命も絶えようとしてゐる。船をあやつることに敏捷なる船夫よく早く來て自分を助けよ。

○

此の時伏せたる兵、なた彼方に起こり諸共に矢刺して追ひ攻む。皇子は河原の崎に至りて沈みぬ。稚郎子の兵ども依つて鉤を以て河を探したるに其の衣の甲にかゝりてかわらと鳴りたりしかば、此の地を河原と名づけぬ。こゝに死骸を掻き出し、時稚郎子の皇子歌ひたまへる歌

千早人宇治の渡りに、渡り出に立てる梓弓檀弓、射きらんと心は思へど、
射捕らんと心は思へど本邊は君を思ひ出、末邊は妹を思ひ出、いら歎く、
其處に思ひ、悲ししく此處に思ひ、射きらずぞ來る、梓弓檀弓 (古事記)

智破椰臂等、于知能和多利珥、和多利湍珥。多氏屢阿豆瑳由瀨摩由瀨、伊
枳羅牟苔虛虛呂破望閑耐、伊斗羅牟苔虛虛呂破望閑耐、望苔弊破、枳瀨烏
於望臂泥、須惠弊破、伊暮烏於望臂泥、伊羅那鷄牟區、曾虛珥於望比、伽
那志鷄區、虛虛珥於望臂、伊枳羅儒層區屢、阿豆瑳由瀨摩由瀨、

○千早人宇治の渡りに……は前述べた處と同じである。○渡り出に立てる……はその宇治川の渡しわたの端をいふので、渡頭に立てるの意である。○梓弓、檀……は稚郎子の軍兵が持つてゐた弓をいふのである。○射きらんと心は思へど……は射發らんとこの意で、射放さうと思ふがの意味、○射捕らんと心は思へど……は矢張同じ意味で、弓を射て河に流れた大山守皇子を捕獲しようと思ふが意、○本邊は君を思ひ出……は後の末邊云々とともに弓につく縁語である。弓の上の方を末と云ひ、弓の下の方を本といふのである。で此の本邊といふのはつまり稚郎子と彼の大山守皇子とは同じ父親から血を分けた兄弟であるから云つたので、こゝの君と云ふのは應

神天皇をさしたのである。又末邊は妹を思ひ出……といふのは大山守皇子の妹を指して云つたのである。親の關係は弓で云へば本であり。妹の關係はその末のやうなものである。本末と弓に寄せて修飾した修辭が面白い。察するに大山守皇子の妹の大原皇女が滂來田皇女か、稚郎子の妃に配されてゐたものと思へる。○いら嘆くそこに思ひ出……は苛々とそれが悲しく思はれるの意。○悲しけくこゝに思ひ出……矢張前と對句で、それが悲しいばかりにの意、○射きらずぞ來る、梓弓檀弓……はさすがに大山守皇子は憎くゝはあるが、親の關係を思ひ、妹の關係を思ひ、いろいろ悲しくなつて、遂に弓を射放すことが出來ず、そのまゝ歸て來たとの意である。

一篇意は、宇治川の渡頭に我が兵どもが弓を立て矢を揃へて敵なる大山守皇子に對つてゐた。その時自分（稚郎子自身の言葉）も弓を射放して皇子を殺さう捕へようと思つたが、本を思へば皇子も自分も同じ兄弟であるから、それにつけても父君應神天皇のことが思ひ出される、又末の分れを思ふと、皇子の妹のことが悲しく思

はれる——さぞ今こゝで皇子を殺してしまつたらば亡き父も悲しまれるであらう。又あの皇子の妹も兄の最後を嘆くであらう。——それを思ひ之れを考へて悲しくなつたので、さすがに大山守に弓を引き兼ねてそのまゝ歸るのである。自分のこの弓を放たずに……調子の整つた歌である、のみならず此の稚郎子の性情のやさしく同情深い處がよく表はれてゐる。稚郎子と御兄仁德天皇とが、應神天皇の崩御後三年の間位を譲り合つて居た事なども此の御歌から考へて來ると、やはり稚郎子の性情が仁慈に富み同情に富んでゐた結果であると思はれる。實に奥ゆかしい皇子であつたと察せられるのである。

○

大鷦鷯命（仁德天皇）難波の高津の宮に在して天下を治め給ふ。こゝに天皇吉備の海部直が女
黒姫と云へるが、顔美はしきを聞召して之れを喚上げ給ひぬ。されど姫は皇后磐姫の嫉みを畏
れ故國に逃れ行きぬ。天皇高臺に在して其の黒姫の船出するを見さけて歎ひたまへる歌

沖邊には小船連ららぐ黒崎の眞佐豆子わぎ妹國へくだらす。(古事記)

淤岐幣邇波、袁夫泥都羅羅玖、久漏邪岐能、摩佐豆古和藝毛、玖邇幣玖陀
頁須、

○沖邊には小船連つらぐ……は沖の方を見ると、今日はいつものにまして小船が幾つも連り群れてゐるとの意○黒崎の眞佐豆子……の黒崎は今も備中の國に黒崎といふ處があると云ふがそれである。眞佐豆子はその姫の別の御名である。黒姫は宮中に召されての名、眞佐豆子はその以前の名である。○わぎもは我妹である。○國へくだらす……は故郷の吉備の國へ都から今下らうとして船装ひをしてゐるとの意。一首の意は、難波の海には今日はいつともより小船が群れて浮かんでゐる。おもへば今日はあの吉備の黒崎から來てゐたあの眞佐豆子と云つた我が愛しい妹が國へ歸らうと船出をする日であるのだ……。

やがて天皇黒姫を戀ひ給ふ情に堪へず、皇后を欺きて淡路島見んとのり給ひて行幸せる時、淡路島にて遙かに彼方を見さけまして歌ひ給へる歌

押し照るや難波の崎よ出で立ちて、我が國見れば、淡路島、磯敷盧島、檳榔の小島も見ゆ、狭氣つ島見ゆ。(古事記)

淤志豆流夜、那爾波能佐岐用、伊傳多知豆、和賀久邇美禮婆、阿波知志摩、游能碁呂志摩、阿遲摩佐能、許志麻母美由、佐氣都志摩美由、

○押し照るは難波の枕詞である。○難波の崎よ……は難波の崎よりの意である。○國見をすれば……國原を見ればとの意で、海上に出で四方御覽になつたのである。○此の御歌に入つてゐる四つの島に就いては、磯敷盧島、檳榔島は何れも淡路島の附近にある小島であると云ふ。狭氣つ島に就いては何處であるか分らない。或ひはその當時はあつたが、今はもう海中に没したのかも知れない。一篇の意は、あの姫の行くへが懐しさに、今此の難波の崎に出で、四方を眺める

と淡路島、磯取廬島、檳榔島、佐氣島などがはる／＼と見渡されるが、あの黒姫は影も見え無い。なまなかに島々の見えるのが悲しい……との意。

○
天皇つひに堪へずして、海上より吉備の國へ渡りましぬ。こゝに黒姫はその國の山縣に天皇を座まさせしめ大御飯を獻りぬ。また大御羹を煮んとして青菜を摘める時、天皇そこに至りまして歌ひたまへる歌、

山縣に蒔ける青菜も吉備人とともにし摘めば楽しくもあるか (古事記)

夜麻賀多邇、麻祁流阿袁那母、岐備比登登、等母邇斯都米婆、多怒斯久母阿流迦、

○山縣は山の畑である。神代八千矛の神の歌の處にて説いてある。○蒔ける青菜……は蒔いた菜の青く生えたのを云つたのである。○吉備人……とは黒姫を云つたのである。姫は吉備人であるからである。○ともにし摘めば……は一緒に摘めばで

ある。ともにし、し文字は意味を強める爲めの助辭である。○楽しくもあるかは楽しくもあるかなと同じである。か文字はかなと云ふ感嘆の意味を持つてゐる。

一首の意は、山の畑に蒔いた菜の青々と生えたのを懐かしい我が吉備人(黒姫)と一緒に摘んでみれば心には何も思ふことなく楽しいわい……との意である。天皇の皇后である處の磐姫は非常に貴人でもあつたが又大變に嫉妬深い方であつて、天皇は幾度も此の爲めに苦しめられたのである。今吉備の山へ行つてその畑地の菜を摘んでゐる黒姫の傍に立つて、「楽しくもあるか」と宣はせられたのは如何にも御尤もな言葉と思はれるのである。仁徳天皇の愛情の濃やかな處は此の一首にもよく表はれてゐるのである。

○
限りあれば天皇は還幸まし給ひぬ。此の時黒姫の獻れる歌

大和邊に西風吹きあげて雲はなれ退きをりとも吾れ忘れぬや (古事記)

夜麻登幣邇、爾斯布岐阿宜且、玖毛婆那禮、曾岐袁理登母、和禮和須禮米夜、

○大和邊に……とは天皇のいます難波の都を云つたのである。難波は攝津であるが、帝都は今迄代々大和にあつたから、難波の帝都をも大和邊と概括して云つたのである。○西風吹きあげて……は西風が吹いて、その風が空へ飄揚する様を云ふのである。○雲ばなれ……はその風の爲めに雲が翻舞し離散するのである。此處は次ぎの句の「退き居りとも……」と云はん爲めの序詞である。○退き居りとも……はしりぞき居るとも意である。遠退き居るとも解するも同じである。○われ忘れめや……は私は天皇のことを御忘れ申しはしないとの意。

一首の意は、都の方へ西風が吹きあげて、雲が散散になつて行くやうに、たとへ今こゝに天皇と別れて、自分だけ吉備に離れ居らうとも、どうしてあなたを御忘れ申すことが出来よう。忘れる間とはない……との意で、古代婦人の切實な感情が

見える。

○

姫また歌ひて曰く

大和邊に行くは誰がつま、隠り水の下よ延へつゝ行くは誰がつま (古事記)

夜麻登幣邇、由玖波多賀都麻、許母理豆能、志多用波閉都都、由久波多賀

都麻、

○たがつま……は誰れの夫であらうとの意で、つまり黒姫は斯んな雄々しく心美はしい天皇にも晴れて仕へ奉ることの出来ない身であることを悲しんで、彼の皇后の御身の上を羨まれて誰が夫と云つたのである。○隠り水……は草などに隠れてありとも見えぬ水を云ふのである。隠り沼と云ふ言葉と同じである。○下よ延へつゝ……は草に隠れた水の草葉の下より僅に流れ通うてゐる如くの意味である。姫の身はさながら隠り水が草葉の下を忍びつゝ流れ通ふやうに、人目を忍んで只心の下に天

皇のことを思ふ身の上であるから、斯う云つたのである。實に妙じき比喩である。
○行くは誰がつま……初めの言葉を今一度繰り返して云つたのである。今自分は人
知れず天皇を思ふに過ぎない身であるのに、今あゝして御還御になる天皇を誰が如
何なる人が夫として仕へ奉るのであらう。あゝその晴れて仕へ奉る太后の磐姫の身
の上こそ羨ましいとの意である。此の歌は猶他の意味にも解し得るのである。それ
は天皇御自身が人目を憚つてひそかに吉備の國へ行幸になつたのであるから「隠り
水の下よ延へつ」と云ふのを天皇の今還御される忍び姿に比べて云つたのである
とも解せられる。その解にすれば一首の意は、今帝都へ御還りになる天皇は誰れの
夫であらう。あゝして打ち忍びつゝ、隠り水の草葉の下を流れ行くやうに御出でな
さるが、あゝあの天皇を誰れが夫として仕へ奉るであらう。あの帝都にゐられる皇
后こそ羨ましい……何れがよいか斷言出来ない。たゞ萬葉などに使つてゐる隠り沼
の意味から推して行くと前の方の解がよいと思へる。

○
天皇の十六年秋七月、宮人桑田久賀姫を諸臣に見せしめて宣はく、朕此の女を愛せんと思へど
太后の妬みありて愛すること難し今や姫漸く盛年を過ぎんとす。汝等の中誰れにてもあれ之
れを得て養はんと欲するもの無きかと。歌を以て諸臣に此の意を問ふ。時に播磨の國造速待な
るものあり。天皇の意を奉じて、天皇と互ひに應答して歌へる歌

水底經、臣のをとめを誰れ養はん（仁徳天皇）三日潮、播磨速待巖壞やす、
かしこくとも吾れ養はん。（速待）（仁徳紀）

瀨能曾虚赴、於瀨能鳥苔咩鳥、多例椰始儺播務（仁徳天皇）瀨箇始報、破利摩

波椰摩智、以播區椰輪、伽之古俱等望、阿例椰始儺破務、（速待）

○水底經臣のをとめを……は水底を経あるきつゝある魚のやうな此の宮仕の少女
久賀姫をといふ意味である。魚はうをであつて、うをは約まつてをとる。それを
臣に掛けて歌はれたのである。久賀姫は宮人であるから、朝廷の臣であるのである

上古には斯う云ふ言葉の云ひ掛けが多い。又此の少女を水底^{みぞ}と形容されたのは、
姫が皇后の妬みに逢つて、天皇の愛を正面に受けることが出来ないから、さながら
日蔭物のやうな水底を經あるいてゐるやうな身の上であるから云はれたのである。
○誰れ養はん……は誰れか養ふものは無いかとの意で、天皇が諸臣に向つて、誰れ
にでも欲しいと云ふものに得させるとの意を述べられたのである。○三日潮……は
月の三日目に當る日の潮は非常に勢ひの早いものであるといふので、下の速待を云
ひ出さうとする序調である。別に意味は無い。○播磨速待は前文にもある通りその
國造の名である。巖^{いわ}壊やす……はその潮の早い勢ひで堅い磐石をも壊し崩すやうに
との意で、次ぎのかしこくともを云ふ爲めの序調である。○かしこくとも吾れ養は
ん……は天皇の愛されようとする少女を御貰ひ申すと云ふのは、例へば彼の大きい
巖を壊え落とす事のやうに、恐れ多いことであるが、仰せに従つて私がその少女を
頂いて育^{はぐ}くみ養はうとの意である。

一篇の意は、水底をくぐりつゝ經あるいてゐる魚のやうな此の宮仕の少女を、誰
れか貰はうと云ふものは無いか——斯う天皇が云はれたので、その従者の中の一人
播磨速待と云ふものが答へ奉つて歌つた。——月の三日目の潮^{うしほ}の力^{ちから}であの大きな巖
を壊すやうに、誠に恐れ多いことであるが、此の速待がその少女を御貰ひ申して養
つて妻^{つま}といたしませう。

○

二十二年正月天皇八田皇女を納れて妃と爲さんとす。皇后聽き給はず依つて天皇歌を以て此の
事を皇后に乞ひ給へる歌

貴人^{うぢひと}の立つる誓言^{ちかご}、をさゆづる、絶え間繼^{つぎつぎ}がんに並べてもかも。(仁徳紀)

于磨臂^{うまひ}苔能、多菟屢^{たると}虚等太氏、于佐由豆流、多由磨菟^{たよも}餓務耳、奈羅陪^{なら}氏毛
餓望、

此の八田皇女と仰せられた方は、矢田若郎女と申された方で、菟道若郎子^{うぢのわかにらつこ}の同母

妹である。若郎子が帝位を仁徳天皇に譲る爲めに自ら死なれた時、仁徳天皇に遺言して此の八田皇女を皇后として貰ひ度いと云ふことを頼まれてゐるのである。で、此の皇女は仁徳天皇には異母妹に當らるのである。○貴人の立つる誓言……は貴人の立てる誓言には偽りは無いの意を述べられたのである。○をさゆづる……のゆづるは弦である。をさは掛けかへる爲めに用意してある第二の弦をいふのである。をさの語源は守部の説によると、掛け替の爲めで別に藏めて置く義から出たのであると云ふ。で、をさゆづるは藏弦である。○絶え間繼がんは掛けかへの爲めの弦であるから、本弦の絶えて用を爲さない間を繼ぐ爲めの假りの物であるとの意である。○並べてもかも……は皇后一人で無く、八田皇女をも一緒に二人並べて置きたいとの意である。

一首の意は、貴人の立てる誓ひには神かけて虚はない。今自分もお前の前に誓言する。どうか八田姫を納れるのは只ほんの掛け替への弓弦を置くやうなものである

から二人一緒に住むことを聴いてくれ、決してくお前を疎んずる心からするのでは無いから……。

○ 皇后答へたまへる歌

衣こそ二重もよき小夜床を並べん君はかしこきろかも。(仁徳紀)

虚呂望虚曾、赴多弊茂豫者、佐由耐虚烏、那羅陪務者瀾破、箇辭古者呂箇茂、

○衣こそ二重もよき……は衣服は下着上着と取り重ねて着しても差支は無いが、○小夜床を並べん君……は夜の床を二人並べて敷くといふあなたはの意、○かしこきろかも……は恐れ多い御心であるとの意で、裏には天皇の冷酷な心を恨み申すとの意をほめかしてゐるのである。

一首の意は衣服ならば二つ重ねて着ても見よいものであるが、小夜の床を二妻並

べて敷かうと仰せられるあなたの御心は畏ろしい御心であるわい……。こゝで「衣こそ二重もよき」と云はれるのは、古くより妻を幾人も持つことを衣服を幾つも重ねることにとたとへて居るから、斯う歌はれたのである。神武天皇の條の歌に前妻をこなみと云ひ、後妻をうはなりと云はれてゐるのも衣のことから出てゐるのである。神武の條の歌を参照すべし。又後世他の妻を持つたと云ふ意味の歌に「我が妻ならぬ妻なかさねぞ」と云ふのがあつた。衣の褻のことに比べて歌つたのである。

○

天皇また歌ひたまひて曰く

押し照る難波の崎の双び濱ならべんとこそ其の子はありけめ。(仁徳紀)

於辭氏屢那珥破能佐耆能、那羅弭破麻、那羅陪務菩虛會、會能古破阿利鷄米、

○双び濱とは難波附近の地名であると思へるが今判然しない。こゝ迄の言葉は次

ぎのならばんとこそといはんための序調である。○ならばんとこそ其の子はありけめ……は夜の床を天皇と並べて敷かうと思つてゐるのであらうその子は……との意で其の子とは今新に妃として入内させようとしてゐる八田皇女を指すのである。八田皇女は前にも述べた通り若郎子の同母妹であるから、仁徳天皇とは異母兄妹の關係である。若郎子は死なれる時に此の皇女を妃とするやうにと遺言をして逝かれたのであるから、天皇は此の遺言を重んじて、今妃とされようと思はれるのである。皇女は此の時すでに御年も盛りを過ぎようとしてゐられたので、天皇は遺言はありかたぐい一日も早く入内させなければならぬと切に思はれたので、天皇の御同情の深い事が此の邊にもよく表はれてゐる。仁徳天皇の斯う云ふ御性質は獨り此の御歌ばかりで無く、前後幾首の歌にも至る所に此の御性質が表はれてゐる。讀者は特に此の邊にも心を注いで見られたい。

一首の意は、あの難波の崎に二つ並んでゐる双び濱のやうに、この私と、二つ並

べて床を敷かうと、兼ねてから思つてゐたのであらうに、その皇女の心を思ひやつて、さうつらい仕打ちはしないやうに……と皇后の妬みの心を柔らげようとなされた歌である。

○

皇后また答へて歌へる歌

夏虫の火虫の衣二重着て、圍み彌足りはあに好くもあらず。(仁徳紀)

那菟務始能、警務始能虚呂望、赴多弊耆氏、箇區瀾夜多利破、阿珥豫區望、阿羅孺、

夏虫の火虫の衣……の夏虫火虫はどちらも蛾をさしたので、つまり蠶のことを云つたのである蛾は火を慕ふ虫である。衣とはその蠶(蛾)は大方繭を作つて、その中へこもるものであるから、丁度衣を着て中にこもるやうなものである。で此の衣は繭のことを云はれたのである。○二重着て……は一重ならず二重も着てといふ意で

今二人の皇妃を納れやうとされる天皇に譬へて云つたのである。○圍み彌足りは……といふ言葉は了解し難いが、古來からの註釋は「そんなに幾重かの衣に圍まれて彌足りに足ることは……」との意に解してゐる。満足の上にも満足を食られるのはとの意である。○あに好くもあらず……は豈に善事ならんやとの意で、まことに善い事では無いとの意である。

一首の意は、夏虫の蠶の繭のやうに一重ならず幾重かの衣に圍まれて、満足の上にも満足を食られるといふことは、善いことではない……。此の磐姫皇后の強情な御心——どこまでも愛を専らにしようとする御性質も實に有り難く尊いものであるといふことが、之れ等の作によりて伺はれるのである。

○

天皇また歌ひたまひて曰く

朝妻の日介の小坂を片泣きに、道行くものもたぐひてぞよき。(仁徳紀)

阿佐豆磨能・避箇能鳥佐箇鳥、箇多那耆珥、瀾致喻區茂能茂、多愚警氏序
豫枳、

○朝妻……は大和の葛上郡にある山の名である。○日介の小坂……もその山の坂路につけた名である。此の坂道は皇后の故郷の大和の長柄といふ土地への往來に當つてゐるのである。皇后がその里歸りの折に、此の小坂で難澁せられ泣かれたものと見える。○片泣き……は一人で泣くこと、○道行く人も……は一人泣き乍ら道行く人といふのでつまり里歸りなどの時、一人泣き乍ら、その小坂の道を歩いて行く皇后の寂しい苦しい有様を見るにつけても……の意である。○たぐひてぞよきは相副ひ相並びてゐる方が心もまぎれてよいものであるとの意である。たぐひは比ひで。ならぶ伴ふなどの意である。

一首の意は、あの里歸りなどの時、朝妻山の日介の小坂の道を一人泣き乍ら歩いてゆくそなた(皇后をさす)の寂しい姿を思ひやるにつけても、一人といふものは寂

しいものである。それだから八田皇女を納れることに同意して、そなたも皇女と日夕相親しんで互ひに慰め合つたらばさぞ心もまぎれて宜からうに……。斯やうに天皇は皇后と互ひに歌の贈答をしてどうか皇女を納れるようにと勸めて見たけれども皇后は遂に聽かれなかつた、天皇も仕方がなくてそのまゝにされてゐたが、程經て天皇の爲めには好い機會が到來したのである。次ぎの歌はその有様を述べてゐる。

○
天皇の三十年秋九月、皇后紀伊國に行啓し給ひ、熊野の岬に到り御綱葉を採りて還ります。
此の時天皇皇后の在さるるに乗じて遂に八田皇女を宮中に召されぬ。皇后難波の津に到りまして此の事を聞召して大に恨み給ひ、その採らせる御綱葉を悉く海に投じ、且つ御船を岸に着けしめず。天皇事の由を知らしめさず親ら難波津に出てまし、皇后の船を待ちつゝ歌ひたまへる歌

難波人鈴船執らせ腰なづみ、その船執らせ大御船執れ。(仁徳紀)
那珥波譬苔、須儒赴泥苔羅齊、許辭那豆瀾、曾能赴泥苔羅齊、於朋瀾赴泥

苦禮、

前文にある三綱葉とは三角檜葉を約めて云つたのである。葉は厚く常緑樹で、葉の末が三つに岐れて角のやうになつてゐる。神事の儀式などに酒を盛られるために用ゐられた葉である。○難波人……とはその難波津の人を呼びかけて云つたのである。○鈴船執らせ……の鈴舟とは、當時の官船には皆鈴をつけてゐたのである。その鈴が波の動搖につれて鳴つたものと見える。在原行平卿の歌にも「鈴舟をよせ來る波に驚きて須磨の上野に雉子なくなり」といふ歌がある。執らせ……はその船の綱手を執つて此方へ引き寄せよとの意である。○腰なづみ……は前の日本武尊崩御の際の歌に述べてゐいた。○大御船執れ……はその大御船をこなたへ引き寄せよとの意。

一首の意は、そこにゐる難波人よ、あの岸にも着かず波に漂うてゐる皇后の船をこなたへ引き寄せよ。汝等の腰迄海水に浸してあの御船をこなたへ引き寄せよ、

そこの難波人達よ……。

○

されど皇后は難波津に泊りたまはず、船を引かせて淀の江を渡り、山城より大和に向ひたまひき。翌くる日天皇舎人の鳥山といふを遣はして皇后の後を追ひて呼びかへましむ。此の時天皇の歌ひたまへる歌

山城にいしけ鳥山いしけしけ吾が思ふ妻にいしけ逢はんかも。(仁徳紀)

夜麻之呂珥伊辭鷄苔利夜菴、伊辭鷄之鷄、阿餓茂赴菟摩珥、伊辭枳阿波牟伽茂、

○山城にいしけ鳥山……のいしけといふのはい及びである。即ちいは及びの發語で、及びは追ひ及び鳥山よとその舎人に命ずる如く仰せられるのである。鳥山は舎人の名である。○いしけしけ……は追ひつけと重ねて急ぎ立てる御言葉である。○吾が思ふ妻に……は我が戀しく思ふ妻にと云ふので、皇后をさへられたのである。

○いしき逢はんかも……は早く追いついて皇后に逢つて連れ戻し来よとの切迫せる情である。逢はんかもは逢はんかまあとの意で、早く急がなければ逢へないかもしれぬと、やゝ前途が不安に思はれたのである。かもは感嘆の言葉であるが、裏面には疑ひの意味がある。

一首の意は、山城にて追ひつくやうに疾く急いで鳥山よ、さあ早く追ひつけ追ひつけ、あの戀しい我が妻に早く追ひついて逢ふやうにせよ。ともすれば逢へないかも知れぬ。あゝやるせない此の心であるはよ……。その際の切迫急促した天皇の御心が一首の首尾に調子を以て響いてゐる。まことに美はしい御歌である。やゝ狼狽し取り亂した御心も目に見るやうである。

○

されど皇后は猶還りまさず、山城川に至りまして歌ひたまへる歌

つぎねふ山城川を河のぼりわがのぼれば、河隈に立ちさかゆる、百足らず

箭稜の木は大君ろかも。(仁徳紀)

菟藝泥赴、椰麻之呂餓波鳥、箇波能朋利、和餓能朋例婆、箇波區莽珥、多知佐箇踰屢、毛毛多羅儒、椰素麼能紀破、於朋耆瀾呂箇茂、

○つぎねふは山城の枕詞である。山城川とは淀川の上流木津川の一部を云つた名であると思はれる。○河のぼり……は河を浜つたのである。○河隈は河の折れ曲る處を云ふ。○百足らず……は百に足らないとの意で、やがて次のやそばの木の八十に云ひ掛ける枕詞である。○やそばの木は箭稜の木で、木の枝に箭羽のやうな稜の附いてゐる木である、すべてかどを稜と云ふので、彼の蕎麥の實も稜形であるからそばと名づけたのである。大君ろかも……のろ文字は助辭である。大君かもと云ふも同じことである。

一篇の意は、山城川を浜上つて來ると、その河の折れめくくに立ち榮え繁りに茂つてゐるあの箭稜の木は大君の姿にも見えるはい……と、さすがに一時のつらい心

から天皇の仰せを呑みして、茲まで來は來たが、戀しい情は人知れず彼の河隈の木立にも大君の姿を思ひ出してなつかしいとの御歌である。強い心であられた皇后もつまりは女である。このくづされたやさしい御歌を見て妬ましさ、人戀しさとの一途にとつ、あいつ、いら〜と迷ひ歎かれた御心のほどを思ひやられるのである。

○ 此の時皇后また歌へる歌

つぎねふや山城川を、河のぼりわがのぼれば、河の邊に生ひ立てる、烏草樹を、烏草樹の木、しが下に生ひ立てる、葉廣五百箇眞椿、しが花の照りいまし、しが葉の廣りいますは大君ろかも。(古事記)

都藝泥布夜、夜麻志呂賀波袁、迦波能煩理、和賀能煩禮婆、迦波能倍邇、淤斐陀豆流、佐斯夫袁、佐斯夫能紀、斯賀斯多邇、淤斐陀豆流、波毗呂由都麻都婆岐、斯賀波那能、豆理伊麻斯、芝賀波能、比呂理伊麻須波、淤富

岐美呂迦母、

○ 烏草樹を烏草樹の木……烏草樹とは木の名である。しやくぶの木又させぼの木とも云ふのである。黒い實が生つてそれを食ふことが出来ると云ふ。烏草樹を……のを文字はよと同じの感嘆詞である。さしぶよさしぶの木よ……と呼び掛けて云はれたのである。○しが下に生ひ立てる……のしがは其がと同じで、又自がと訓ませる場合もある。「自が心よりおぞや此の君……」など、云ふ歌も萬葉にある。此の場合はおのが心からとの意味になるのである。○葉廣五百箇眞椿……は葉の廣い幾つも群がり繁れる眞椿との意で、眞は椿に添へた助辭である。○五百箇はもと五百箇と云ふ言葉で、五百箇岩群、五百箇垂葉など云ふ言葉がある。そのいほつが約まつてゆつとなり、つが濁つてゆづとなり、さうして五百箇岩群、五百箇り葉など、轉用せられたのである。それでゆづとは數の繁く多いのを云ふ言葉である。こゝも椿の葉の青々と繁く重りあつてゐるのを云ふ言葉である。○しが花の照りいまし……

…はその椿の花の照つて居るの義、いまずは坐ますの義である。○しが葉の廣りゐますは……その椿の葉の青々と廣がつてゐるの義、○大君ろかも……は嘗て述べた通りである。

○一首の意は、我が夫の(天皇の)御意に従はないで、強いて此の山城川をさかのぼつて、こんな山深い處へ来てしまつた。見れば川邊には烏草樹の木が生ひ茂つてゐる。その烏草樹の木よ、その烏草樹の下に生ひ茂つてゐる葉の廣い椿の群を見ると、そのあか／＼と照つてゐる花も、その廣がつてゐる葉も、皆わが夫の姿さながらで、懐かしくてならない。

○

それより皇后は奈良山を越え、葛城を望みて又歌へる歌

つぎねふ山城川を、宮上りわがのほれば、青によし奈良を過ぎ、小楯立つ
大和を過ぎ、我が見が欲し國は、葛城高宮我家のあたり。(仁徳紀)

兎藝泥赴、椰莽之呂餓波鳥、瀨椰能朋利、和餓能朋例麼、阿烏珥豫辭儺羅
烏輪疑、烏陀氏多津夜莽苔烏輪疑、和餓瀨餓朋辭區珥波、箇豆羅紀多伽瀾
椰、和藝弊能阿多利、

○宮上りわがのほれば……は皇后がこの際の旅路はひたすら難波津を遠のいて自分の故郷である大和の葛城の高宮附近へ行かうとせられたのであるから、その高宮上りをせられる旅を簡略に宮上りと云はれたのである。○青によし……は奈良の枕詞である。語源は青土である。青い土との義で、奈良は平坦の土地であるから、青土と冠らせたのである。この奈良は奈良坂を云ふのである。○小楯立つ大和を過ぎ……は楯のやうに山の立つてゐる大和を過ぎとの意である。大和の國をいふのは無くて先帝の宮居のあつた輕の地方をさして云つたのである。この大和は山のやまと、大和のやまとを兼ねた掛け言葉である。○我が見が欲し國……は自分の見たいと欲する國はの意、○葛城高宮我家のあたり……は大和の葛城の高宮といふわ

が故郷の家のある所であるとの意、

一首の意は、山城川を高宮上りにのぼつて來ると、いつのまにか奈良坂も越えてしまつた。楯のやうに山の立つてゐる舊都(輕の地)も通り過ぎるのであらう。さうしてその向ふに今も見えてゐるあの故郷の家のある葛城の高宮こそは、自分の行かうと思ひ楽しんでゐる所である……。久しく難波の内裏に住んでゐて、自分の心からとはいふものゝ、いろ／＼人情の峻しさを經驗された皇后が、今久しぶりで故郷の山を見故郷の風物を御覽になつて、如何ばかり懷舊の情に動かされたことであらう。あの故郷こそは自分の行くべき安住の處であるとの御述懐は、やがて皇后が、人情世界の雜紛ごたごたに飽きられた悲しみの御歎聲であるとも解される。その越えて來た山川は、やがて皇后の過ぎて來た人生の幾山川であるとも思へる。懐かしい歌である。皇后は此の後暫くして大和の故郷を出で、山城の國へ還り、宮室を筒城つじぎの岡おかの南に建て、そこにゐられることになつた。そして天皇の御所へは行かうともしなかつた。

つた。

○

こゝに天皇皇后の山城へ上りましたといふことを開召し和爾わに臣みみ口子を遣はして皇后を迎へんとして歌ひたまへる歌

御諸みもろのその高城たかきなる。大井子おおいこが原はら、大井子おおいこが原はらにある。肝向かんむかふ心をだにかあひ思おもはずあらむ。(古事記)

美母呂能、曾能多迦紀那流、意富章古賀波良、意富章古賀波良邇阿流、岐毛牟加布、許許呂袁陀邇迦、阿比淤母波受阿良牟、

○御諸みもろは大和の葛上郡にある山である。その山の續きに葛城の明神がある。○その高城なる……はその三諸山の麓の高地を云ふ地名である。なるはにあるの意である。○大井子が原……は原の名で古へ孝昭天皇の池心宮いけこころのみやといふ都のあつた處である今は蓬ヶ原といつてゐるさうである。○肝向ふ心をだにか……の肝向ふは心の枕詞

である。心をだにかは、朕の心をだにの意である。こゝへ心をだにと云つたのは突然のやうに聞こえるが、之には由來があるのである。前に述べたやうに、此の大井子が原は古へ池心の宮の舊跡であるから、その池心の名のごとく、せめて汝が此の朕の心を思つて呉れるならばとの意を含めて天皇が仰せられたのである。○あひ思はずあらん……はあひ思つてくれる真心もないのであらうとの意。

一首の意は、そなたが今行つてゐる大和の三諸山のあの高城にある大井子が原よその大井子が原にある池心といふ舊都の名もそなたには甲斐の無い名であるはい。せめてその名に因んで、少しでも此の朕の心を思つてくれたならと思ふが、そなたにはもう此の心をすら相思ふ氣はないと見える。それが悲しい……との意。

○

口子くちこのまみ 臣こみ此の天皇の御歌を奏なまさんと皇后の前まへつ殿戸より平伏ひれよして奏せば、皇后は後のちつ戸に出で違ちがひ、また後のちつ殿戸より平伏して奏せば皇后は前まへつ戸に出で違ちがひぬ。口子臣はつひに前方さきまへ後方のちまへ

に匍匐はらばひ廻りて庭上に跪き腰は水潦みづたにひぢつ、臣は此の時紅紐あかひもを着けたる青摺衣あをすりのぎぬを着たりけるが、水潦に濡れて青は皆紅あけになりぬ。臣の妹口姫くちのめといふ少女折しも皇后に仕へ奉りて殿内にあり、此の状を見て歌へる歌

山城の筒城の宮に物まをす我が兄を見れば涙ぐましも。(仁徳紀)

椰莽辭呂能、菟菟紀能瀾椰珥茂能莽烏輸、和餓齊烏瀾例麼那瀾多愚摩辭茂

○山城の筒城の宮……は今の綴喜郡に當つてゐる。○物まをすは物申すである。

○我が兄を見れば涙ぐましも……は我が兄が潦はたに濡れてそこに跪いてゐるのを見ると、自分も悲しくて涙ぐましいとの意である。

一首の意は、皇后を御迎へしようとして、こゝの筒城の御所の前に来て物を申さうと跪いてゐる我が兄の姿を——あの雨にぬれしよばれてゐる兄の姿を見ると、自分も悲しくて涙ぐましいとの意、此の時皇后には口子の切なる願をも御聽き入れなさらず、そのまゝ筒城の宮に居つゞけられた。そこで天皇は遂に親しく輿に乗られ

て筒城へ迎に行かれることになるのである。

○

天皇筒城の宮に皇后を訪はんとして、山城河をのほります、時に桑の枝水のまに／＼流れま、
天皇歌ひたまひて曰く

つぬさはふ磐之姫が、おほろかに聞こさぬかも。末桑の木、寄るまじき河
のくま／＼。よろほひゆくかも、末桑の木。(仁徳紀)

兔怒瑳破赴、以破能臂謎餓、飢朋呂伽耳枳許瑳怒加茂、于羅愚破能紀、豫
屢麻志枳、箇破能區莽愚莽、豫呂朋譬喻玖伽茂、于羅愚破能紀、

○つぬさはふ……は蘿さ這ふである。古へは蔓草のことをつな(綱)と云つたので
ある。巖、岩、磐の枕詞である。○磐之姫は皇后の御名である。○おほろかに……
は大ろかの意で、またおほろかとも云つてある。穏和しくとの意である。○聞こさ
ぬかも……は承知しないことかまあ……と感嘆したのである。○末桑の木は……桑

の木末のことで、つまり桑の枝である。○依るまじき……はその桑の枝の流れの
ま／＼に流れて岸に寄りつくこともせぬやうに、自分も依る處もないであらうとの意
○よろほひゆくかも……は漂ひながらよろ／＼と流れて行くはい、あの末桑の木は
との意である。

一篇の意は、磐之姫がおとなしく朕の云ふことを承かうともしない、見ればあの
やうに桑の枝が岸にも寄らいで、さながら朕が、今此の川をよろししながら船で
浜るやうに、あてども無く川の曲り目／＼を流れて行くはい、あの流れてゐる桑の
枝のやうな我が身の上がかなしい……との意、

○

此の翌くる日天皇親しく筒城の宮に皇后を喚ばひまつりたれども、皇后見え奉らず、天皇歌ひ
たまはく

つぎねふ山城女の、小鉄持ち打ちし大根、さわ／＼に汝が言へせこそ、打

ちわたす彌子生なす、來入りまゐくれ。(仁徳紀)

兔糞泥赴、椰摩之呂謎能、許久波茂知、于智辭於朋泥、佐和佐和耳、儼餓
伊弊劑虛曾、于知和多須、那餓波曳儼須、企以利摩韋區例

○山城女は山城の少女といふ意、○小鍬もち打ちし大根……は鍬を持つて畠を打ちつゝ抜いてゐる大根といふことで、大根は今の蘿蔔である。こゝまでは序詞で次ぎのさわ／＼を云はうとする豫備である。○さわ／＼はその大根の白く爽やかなのからさわの同音である騒ぐといふことにかけてので、騒がしくといふ同じ二つの言葉をつめてさわ／＼と云はれたのである。そなたが騒々しく妬み言をいふのでとの意味である。○汝が言へせこそ……は汝が言はせばこそと同じで、又汝が言へばこそと同じである。騒々しく妬み言をいふからの意、○來入りまゐくれ……は斯んなに親しく船に召してはる／＼と參り來たのであるとの意、○打ら渡す……は見渡すことで、はるかに目を遠くへやつて見ることである。○彌子生なす……は

いや子生えするとの意味で、草木が一度芽をきられてもまたその上その上と子芽を生やすやうにとの意で、こゝでは折りから天皇が通つて來た筒城への道のほとりに芽を出してゐた草木を見ての即感を比喻として歌はれたのである。なす……はの如くとの意である。あの見渡す野邊に子生えしてゐる草木の如く、姫が否むにも係らず猶懲りずに幾度も／＼使ひを出して姫を招いたのを云つたのである。○來入りまゐくれ……は、到頭今度は朕親ら來たとの意である。

一篇の意は、山城少女が畠を打ちつゝ掘つてゐた大根のさわ／＼と騒々しい妬み言を執ねくも云ふからして、それをなだめる爲めに今迄も草木の芽生えのやうに次ぎから次ぎへと使ひを出して汝を迎へたが、今はもう堪へきれないので朕が親ら來たのだ……との意である。

○

つぎねふ山城女の、小鉄もち打ちし大根、根白の白ただむき、纏かずけばこそ知らずとも云はめ。(仁徳紀)

兔藝泥赴、夜麻之呂謎能、許玖波茂知于智辭於朋泥、泥土漏能、辭漏多娜
武枳、摩箇儒鷄廢虛會、辭羅儒等茂伊波梅、

○根白の白たむき……はその大根の白いやうに白い腕といふことである。○纏かずけばこそ……は纏かずありければこそその略されたのである。未だ嘗てあの白い腕を纏かずにゐたらば何も思ひはしないのに……との意で、天皇が以前の想ひ出を卒直に歌はれたのである。○知らずとも云はめ……は知らないとも云つてゐられるであらうが、白い腕を纏ひつゝ寝たのであるから、汝は斯うして朕親ら喚ひに来たのをよもや、知らないと云つて強情いことを云ひはしまいとの意である。

一篇の意は、山城少女の鉄を持つて、畠を打ちながら掘つてゐるあの大根のやうな白い腕をまだ一度も、纏いて寝たことがないのならば、知らないとも云へるであ

らうが、そんな浅い關係では無いのであるから、よもや知らないとは云ふまい、わが皇后よ……。如何にも纏綿たる情緒の表はれた御歌である。大根の如く白いたむきとは、この比喩の適切で素直であるのに敬服せずにはゐられない。まして斯う云ふ美はしい思ひ出から皇后の御心をとりなさうとしたのを見ても、天皇が如何に御愛性の豊かであり詩人としても驚發の御才であつたかと察せられるのである。斯うして御心の限りを悉くされたけれども、皇后は八田皇女と一緒に御殿にゐることは出来ないこと云ふことを使を以て天皇に申させ、天皇に御目に懸かることさへせずにしてしまつた。で天皇はそのまま、本意なくも御還御遊ばされたのである。

○

天皇八田若郎女を戀ひして歌ひたまへる御歌

八田の一本菅は、子持たず立ちか枯れなん、あたら菅原、ことをこそ菅原
といはめ、あたら清し女。(古事記)

夜多能、比登母登須宜波、古母多受、多知迦珂禮那牟、阿多良須賀波良、
許登袁許曾 須宜波良登伊波米、阿多良須賀志賣、

○八田の一本菅は……八田の野の一本の菅といふことで、まだ獨り身なる八田皇女を譬へて云はれたのである。八田は大和の國の地名である。○子持たず……はその菅が穂も孕まないでとの意で、つまり八田姫が子も生まないでとの意。○立ちか枯れなん……はそのまゝ立ち枯れしてしまふであらうとの意。○あたら菅原……はあたら惜しい菅原であるはいとの意。○ことをこそ菅原と云はめ……は言葉にこそ菅原とはいふが、それはたゞ譬へである。ほんに……汝は菅原では無い清し女であるはいとの意。○あたら清し女……はそのまゝにしておくのはあたら惜しいほど清い美しい少女であるはいとの意である。

一篇の意は、あの大和の八田の野に生えてゐる一本の菅は、子も持たずして、そのまゝ立ち枯れするであらう。あたら惜しい菅原であるはい。しかしそれはほんの

言葉の上の譬へに菅原とは云ふのであるが、實はお前はそのまゝに置くにはあたら惜しい清い少女であるはい。……濃やかな情深い言葉で、姫の心を動かされようとする有様が窺はれる。

○
こゝに八田若郎女答へて歌へる歌

八田の一本菅はひとり居りとも、大君よしときこさば一人をりとも。

(古事記)

夜多能比登母登須宜波、比登理袁理登母、意富岐彌斯、與斯登岐許佐婆、
比登理袁理登母、

○ひとり居りとも……は姫の御述懐なされる言葉である。仰せのやうに八田の野の一本菅のやうに、子も持たずたゞ一人で斯うして居つても意である。○大君しよしときこさば……は大君さへ私を可愛いと仰せられるならば、かなしくはないと

の意、○一人をりとも、最後に今一度繰り返へして意を強められたのである。

一首の意は、仰せの通り八田の野に生えてゐる一本菅のやうなさびしい身であるけれども斯やうに一人であつても、大君さへ變らずに御心を寄せて下さるならば、決して悲しくは思はない。子も無くて一人をこんな寂しい一人住みの身ではあるが……。かの磐之姫皇后の強い烈しい心と、此の姫の柔しく凡て大君の前に打ち委せてゐるやうな心持ちとを比べて見ると、そこに面白い對照を見出だすのである。

○

四十年春三月日鳥皇女を納れて妃と爲んとす。隼別王子を以て媒介となす。皇子ひやかに親ら娶りて復命せず、天皇その事とは知らず親しく皇女の殿に臨む。時に皇女の織女等歌ひて曰

久方の天金機、目鳥が織る金機、隼別の御襲衣がね (仁徳紀)

比佐箇多能、阿梅箇難麼多、謎廼利餓意、瑠箇難麼多、波椰步佐和氣能、

淵於須比鵝泥、

○久方は天の枕詞である。○天金機……の天と云つたのは、機を織ることはかの神代からの傳へ業であるから天とつげたのである。金機の金と云つたのは、上代機を織る器には金鎖を飾り附けて其の鎖の鳴る音につれて布を織つたのであるから斯う云つたのである。○目鳥が織る金機……は目鳥皇女が今織つてゐる此の機はと云ふ意である。○隼別の御襲衣がね……は隼別皇子の襲衣に仕立てる爲めの豫ねての料であるとの意である。襲衣は上代男が密かに女の許へ通ふ時に着た被衣のやうなものである。襲ね着る衣物といふ意である。がねは名詞に附く言葉であつて豫ねくからその事、その物と、心に思ひ設けて置く意である。未來は皇后になるべき人のことと、皇后がねと云ふ。又此の意味で博士がね、聳がねなどの言葉もある。爰も今織る布が未來は隼別皇子の襲衣の料になるのだといふことが豫ねくから分つてゐるから、襲衣がねと云ふのである。織女等は此の歌を歌つて天皇に皇子と皇

女との關係を暗示したのである。

一首の意は、今日鳥皇女の織つてゐる機は、隼別皇子が目鳥の許へ通ふために着る蓑衣の料であるはい……との意である。

○

すでにして隼別皇子は皇女の膝を枕きて臥しつゝ問ひたまへるは、鶴鶴と隼と何れが捷きと、

こゝに皇女隼捷しと答へ給ひたるに、さらば我れぞ先んずべしと互ひに私語き合へるを天皇聞

召してまたさらに怒り給ひぬ。此の時隼別皇子の舍人等歌へる歌

隼は天にのぼり飛びかけり、五十槻が上の鶴鶴捕らさね。(仁徳紀)

破夜歩佐波、阿梅耳能朋利、等弭箇慨梨、伊菟岐餓字倍能、娑埜岐等羅佐泥。

○隼は隼別皇子を指して云つたのである。○天にのぼり飛びかけり……は早く天へのぼり飛び翔けれとの寓意で、つまり天皇の位を奪つてしまへとの意を此の言葉

に寓して歌つたのである。○五十槻が上の……は槻の木は枝が繁く細かなものであるから五十と添へて云ふのである五十槻のそが省かれていつきとなつたのである。○鶴鶴は鳥の名であるがこゝでは鳥に擬へて大鶴鶴尊乃ち仁徳天皇を云つたのである。○捕らさね……は捕れよとの命令願望の意である。

一篇の意は、隼別皇子よ早く天皇の御位を奪つてあの木高き槻の梢にある鶴鶴のやうな仁徳天皇を捕り殺せよ……との意である。隼別皇子は此の舍人等のすゝめに従つて、やがて兵を起こさうと企てられるのであるが、逸早く天皇の爲に知られ却つて皇軍の爲めに殺されてしまふのである。

○

天皇此の歌を開召してやがて軍を興こし、隼別皇子を殺さむとす。こゝに隼別皇子は目鳥皇女

とともに逃げて倉梯山に登りました。隼別皇子歌ひて曰く

はしだての倉梯山を嶮しみると岩かさかねてわが手取らすも (古事記)

波斯多豆能、久良波斯夜麻袁、佐賀志美登、伊波迦伎加泥豆、和賀豆登良
須母、

○はしだては梯立である。倉の枕詞である。倉は梯子を立て、物を出し入れしたのであるからその枕詞になつたのである。上代の倉は今とは異つて地より高い處へ物を納れるやうに作つたものと見える。○倉梯山は大和にある山である。○嶮しみと……は嶮しい山であるとの意、○岩かさかねて……は岩にすがり乍ら逃げ登るのであるが、あまり嶮しいので皇女は岩にもすがり兼ねて喘ぎ／＼逃げられるのである。○わが手取らすも……は我が手につかまるはいとの意味である。もは嘆感詞である。

一首の意は、梯子を立て倉に上るやうな倉梯山の山路の嶮しさに、姫は岩にもすがりかねてこれこのやうにわが手につかまりながら登るはい。そのなやましい姫を見るのが可憐らしい。

○

皇子又歌へる歌

はしだての倉梯山は嶮しけど、妹とのぼればさがしくもあらず。(古事記)

波斯多豆乃、久良波斯夜麻波、佐賀斯祁杵、伊毛登乃煩禮波、佐賀斯玖母
阿良受、

一首の意は倉梯山は嶮しい山路であるが、我が愛する妹(皇女)と二人して越ゆれば嶮しとも思はない……。日本紀には此の歌の第五句が「安菴かも」となつてゐる何れが正しきか自分は暫く古事記の方をよいとして茲にはそれをあげたのである。此の皇子と皇女とは遂此の軍兵に追はれて大和の宇多の野にて殺されて了ふのである。

戀愛の遂行にも、またその愛情の反動である處の怨みにも妬みにも、凡て古代の人々は自己の生命の全部をうち任せて、烈しい情を表出してゐる。此の奔騰的な献

身的な熱情が尊いのである。歌史を閲して平安朝に來ると、此の眞實の感情は、最早や藝術化され、知識的にも遊戯的にもなつて來てゐるのを感じる。

○

五十年春三月河内人來りて奏すに茨田堤に鴈子を産めりと、依つて使を遣はして見せしめたるに誠に然りき。こゝに天阜歌を詠みたまひて武内宿禰に問ひたまはく

玉きはる内の朝臣、汝こそは世の遠人、汝こそは國の長人、秋津洲大和の國に、鴈子産と汝は聞かずや。(古事記)

多麻岐波流、宇知乃阿曾、那許曾波、那古曾波余乃登保比登、余乃那賀比登、蘇良美都夜麻登乃久邇爾、加理古牟登那禮波岐加受夜

○玉きはる……は魂來經るの意であるといふことは前に述べた。内の枕詞になつたのも前に説いた處であるが、今一度述べやう、内は現と音が似てゐるので、現といふのから内へ轉じたのである。内といふ意味を持つてゐる枕詞ではない。○朝臣

は矢張り景行天皇の條に説いて置いた。吾兄臣の約まつたのである、天皇の親しい臣の義である。○汝こそは世の遠人……とは武内宿禰は六朝に仕へた功臣であつて非常に長壽であつたから、世の遠い昔から生きてゐる人との意である。○汝こそは國の長人……も前の詞と同じ意味を有つてゐる。○秋津洲大和の國に……は神武天皇が大和に國見された時、此の大和を稱して蜻蛉の譬喏せる國と云はれたので、其後大和を蜻蛉洲といひ、猶之れが大和の枕詞となつたのである。後やまとは日の出る國といふ意から日本の文字を宛てることになつた。○鴈子産と汝れは聞かずや……は奇しくも鴈が子を産むたと云ふが、御前はその由を知つて居るかと宿禰に問はれたのである。

一首の意は、朕が親しい臣の宿禰よ。汝は此の世の長者であるが、此の日本の國に鴈が子を産むと云ふことは例のあることか、汝こそはその由を知つてゐるだらうに、……。

武内宿禰答へ奉りて歌へる歌

高○光○る○日○の○御○子○、
う○べ○し○こ○そ○問○ひ○給○へ、
ま○こ○と○に○問○ひ○た○まへ、
吾○れ○こ○そ○は○
世○の○遠○人○、
吾○れ○こ○そ○は○國○の○長○人、
空○見○つ○大○和○の○國○に、
鴈○子○産○と○未○だ○聞○か○ず
汝○が○皇○子○や○遂○に○治○ら○ん○と、
鴈○は○子○産○ら○し。 (古事記)

多迦比迦流、比能美古、宇倍志許曾、斗比多麻閉、麻許登邇、斗比多麻閉、
阿禮許曾波、余能那賀比登、蘇良美都、夜麻登能久邇爾、加理古牟登、伊
麻陀岐加受、那賀美古夜、都比邇斯良牟登、加理波古牟良斯、

◎高光る……は日を形容した言葉である。日の御子……は天皇の事を尊稱した言葉。○うべしこそ問ひ給へ……は宜べも御問ひなされたとの意で、つまり善くも御さゝなされたとの意である。○まことに問ひ給へ……は感嘆の餘り重ねて云つたのである。○空見つ大和の國に……の空見つは大和の枕辭である。それは神代に饒速

日命が天磐船に乗りて大空を馳けり。此の國土即ち日本の國を見そなはしたと云ふ古事から出たのである。○汝が皇子やつひに知らんと……はあなたの皇子が遂には此の國土を領知して帝位に登ると云ふその豫ねての吉兆に、鴈が子を産んだのであらうとの意、その皇子は去來穗別皇子で、後履中天皇となる方である。

一首の意は、我が天皇よ、よくも聞き給ふた。ほんによくも聞き給ふた。自分は仰せの通り稀代の長者であるが、此の日本の國に鴈が子を産んだ例は聞かないが、今茨田さいだにその事にあつたのは、大方あなたの皇子(去來穗別皇子)がやがて帝位に登つて此の國土を治しめされる豫ねての吉兆であらう……。

履中時代の歌 (後稚櫻宮朝)

履中天皇灘波の宮に坐し、時、大嘗の豊とよ明あかりの宴を舉げ給ひ、大御酒に酔はして寝ね給ひけ

リ。皇弟墨江中皇子天皇を弑し奉らんとして宮殿に火を放したり。此の時阿知直醉ひ臥し給へる天皇を盗み出て、御馬に乗せ奉り、大和に行幸させ奉りぬ、茲に天皇丹比野に到りて初めて酔ひより醒め給ひ、「こゝは何處ぞ……」と問ひ給ひたるに、阿知直詳かに事の由を答へ奉りぬ。即ち天皇歌ひて宣はく。

丹比野に寝むと知りせば立薦も、持ちて来ましもの、寝むと知りせば。

(古事記)

多遲比怒邇、泥牟登斯理勢婆、多都基母母、母知弓許麻志母能、泥牟登斯理勢婆、

○丹比野に……は河内國の地名である。反正天皇の丹比の柴垣の宮及び雄略天皇の丹比の高鷲の御陵なども皆此の土地にある。○寝ぬむと知りせば……は茲に寝ると云ふことが豫ねて知れてゐたならば。○立薦も……は立てる薦の意であつて、上代天皇皇子等の行幸の際や、又は祖先の祭祀などをする時に、この薦を立て、圍ひ

として、風を防いだのである。立薦の立つと云ふことはそこから出てゐるのである。此の薦は多くは蒲や菅などで作つたのである。蒲の立薦、菅薦など、云つた言葉もある。○持ちて来ましもの……は持つて来ようものを、持つて来なかつたのが残念であるとの意である。○寝むと知りせば……は前の第二句の言葉は今一度繰り返して其の残念な心持ちを切實に表したのである。此の繰り返しの句法は上代の歌に多い。

一首の意は、斯んな丹比野の寒い野原に寝なければならぬと云ふことを豫ね豫ね知つてゐたならば、あの風を防ぐ爲めの立薦を持つて来て、假りの寢所を構へて圍はうものを……

○

天皇殖生坂に到りまして難波の宮を望みたまへば、大殿の火は燃えくぐて、宮を炳くこがせり、
天皇又歌ひて宣はく

○植生坂わが立ち見れば、かぎろひの燃ゆる家むら妻が家のあたり (古事記)

波邇布邪迦、和賀多知美禮婆、迦藝漏肥能、毛由流伊幣牟良、都麻賀伊幣能阿多理、

○植生坂は大和國の地名であつて、前に述べた丹比野の近傍である。○わが立ち見れば……はその植生坂に我が立つて遠く皇居の方を見やればの意、○かぎろひの……は多くは枕辭に使つてあるが、この場合は枕辭でなくて、輝やく火と云ふ意味を有つてゐる。つまり輝ぎる火(かぎる火)である。又輝ぎる日と云ふ意味を表はす場合もある。此のかぎるひのるが同行音のろと相通じてかぎろひとなつたのである火の場合に使つた例は「かぎろひの燃ゆる荒野に……」などで之れは野火の燃えてゐる荒野を云つたものである。又日の場合に使つた例は「かぎろひの燃ゆる春日に……」などである。之れは陽炎のとろくとする春日といふ意味である。○燃ゆる家むら……は燃ゆる家群の意で難波の都の人家の群がりが焼かれてゐる光景を云つ

たのである。○妻が家のあたり……とは妻の住んでゐるあの皇居の邊が今燃えてゐるのであらう、と想ひやつて歌はれたのである。

一首の意は、此の植生坂に自分が立つて、遙かにあの故郷の空を眺めやると、輝く火の燃えてゐるあの家群の邊は、大方わが妻(皇后)の住んでゐる皇居であらうが妻は今どうしてゐるであらうぞ……と其の赫灼たる炎を見ながら、皇后の身の上を案じられた御言葉である。

○

斯くて天皇大坂の山口に到りませる時、一人の少女に逢へり、少女の云ふやう。此の山に多数の兵等隠れてあり。危ふし、當麻路より行かせ給へと、よつて天皇歌ひて宣はく

大坂に逢ふやをとめを路とへば、たゞには告らず當麻路を告る。(古事記)

淤富佐迦邇、阿布夜袁登賣袁、美知斗閑婆、多陀邇波乃良受、當藝麻知袁乃流、

○大坂は大和の國の地名。○逢ふやをとめを……のやは感嘆のやである。をとめは少女である。この少女をのをはにと同じ意味を表はす天爾波であつて、古來其の用例が多い。この一句は大坂で行き逢つた少女に……の意である。○路とへば……は自分の行く道を聞いたのである。○たゞには告らず……は直には告らずの意である。直はすぐ路とか間道とか云ふと同じで、曲路に對して云ふ言葉である。直路をば告げ(教へ)ないでの意。○當麻路を告る……は當麻は矢張り大和の地名である。其の當麻を過ぎて行く道を當麻路と云ふのである。此の道は今天皇の行かうとしてゐる道よりは迂遠な曲り路であるのである。然るにその迂遠な當麻路を教へて、間道を教へなかつたのはそこに伏兵の危難があるので、それを避けさせる爲めである。一首の意は、大阪で出あつた少女に自分の行くべき路をきいたらば、直ぐな間路をば教へずに、あの遠い當麻路を教へて呉れた——あゝこれには仔細のあることであつたは——

允恭時代の歌 (遠飛鳥宮朝)

○ 允恭天皇の八年春二月、天皇藤原宮(大和高市郡)に幸し給ひて、ひそかに衣通郎女そとほりのいらつめの消息を垣間見し給ひぬ。たま／＼姫も天皇を戀しく思ひて、たゞ獨りそこはかと眺めやりつゝありける折なり。天皇の來ましぬるとは知らずして歌ひける歌

吾が夫子が來べき宵なり、さゝがにの蜘蛛の行ひ今宵しるしも。(允恭紀)

和餓勢子餓句倍枳豫臂奈利佐瑳餓泥能、區茂能於虛奈比虛豫比辭流辭毛、

此の歌の作者衣通郎姫は、允恭天皇の皇后忍坂大中女の妹である。嘗て新殿に宴を開かれた時、天皇は琴を親ら彈かれ、皇后は起つて舞を舞はれた。その時皇后から献じた一人の娘がある。之れが皇后の妹の衣通郎女であつた。姫は容姿が殊に美しく、其の肌の色が衣を透すほどであつたので、衣通姫と呼ばれたと云ふことである。爾來天皇は此の姫を愛されて、別に御殿を大和の藤原に造つてそこに住まはす

佐瑛羅餓多、邇之枳能臂毛弘等枳舍氣帝阿麻哆絆泥受迹多儂比等用能未

○さゝら形……とは布へ小紋の形をそめてあるのを云ふのである。さゝらとは小の意である。○錦の紐……はその皇后の衣に附けてある紐である。今の帯の代りで見ればよい。○解き放けて……はその紐を解き放しての意、○數多は寝ねず……は幾夜もく寝たのではない。○たゞ一夜のみ……はたゞ一夜添ひ寝したのみであるとの意である。

一首の意はあの美しく小紋の染めてある姫の錦の紐を解き放して、心ゆくばかり添寝の夢を交したの、幾度もあつたのではない、たゞ一夜であつた。ほんに本意ない逢ふ瀬であるはい——どうか今宵も打ち解けて寝たいものである。——との意。之れは天皇が去年初めて藤原宮へ行幸になつた時の事を思ひ出して、今さらのやうに姫をなつかしく思はれ、今突嗟の場合に、姫の歌を聞いて、さらに愛情の切なさを増されたのである。實にめでたい有り難い御歌である。

○

斯くて其の夜は藤原宮に明けて、翌朝井の傍の櫻の花を見そなしつゝ、天皇の歌ひたまへる歌

華ぐはし櫻の愛で子こと愛でば、早くば愛でず、わが愛づる子等。(允恭紀)

波那具波辭、佐區羅能梅涅許許等梅涅麼、波那區波梅涅孺和我梅豆留古羅、

○華ぐはし……は美しく妙へなる意。○櫻の愛で子……は櫻の花の如く愛らしい子○こと愛でば……は異愛での意で、異常に愛するといふ義である。殊の外に愛すべき子であるとの意。○早くは愛です……は疾くより愛で慈しみ、共に宮殿内に入れて棲むべきであつたに、斯く離れくゝにゐて、稀れに逢ふだけであるのが口惜しいとの意。つまりなぜ早くから愛さなかつたらう……と御自身に打ち嘆く心である。○わが愛づる子等……はわが愛づる此の子、即ち衣通姫を指して云ふのである。

一首の意は、櫻の花の如く美しく妙へなる愛らしい子よ、こんなに普通外れて可愛ゆくてならないならば、早く愛すればよかつたのに、なぜ早くから愛さずにはゐ

たのだらう。あゝ此の美しい愛らしい子を……。天皇の御心には此の姫を早くから皇后として入内させればよかつたにと今更口惜しく感ぜられたのである。其の感情の移り變りが此の一首にはよく表はれてゐる。それと同時に一方に皇后から受ける嫉妬の煩ひに如何に御心を惱ませられたかと云ふことが肯かれるのである。此の歌のことがあつて後、果して皇后から強い嫉みが出て來たので、衣通姫も大に當惑されてゐる。日本書紀に「於レ此衣通郎姫奏言、妾常近ニ王宮ニ而晝夜相續欲レ視ニ陛下之威儀、然皇后則妾之姉也。因レ妾以常恨ニ陛下ニ亦爲ニ妾苦ニ。是以冀離ニ王宮ニ欲ニ遠居ニ然則皇后嫉意少息歟。」それで天皇も姫の心を察して、遂に離宮を藤原宮から河内の茅渟へ移して、そこに衣通姫を住ませることにしたのである。

○

天皇また茅渟の宮に幸し給ふ。此の時衣通郎女歌ひて曰く、

○○○○へに君も遇へやもいさなとり、海の濱藻の寄るときくを。(同上)

等虚辭陪通枳彌阿母閑椰毛、異舍儼等利、宇彌能波摩毛能余留等枳等枳弘、

○とこしへに……はいつまでも永く、○君も遇へやも……は君も遇はせ給へやと云ふ意で、やもは感嘆の助辭である。あなたも遇つて下さいと願ふ意である。○いさなとりのいさなは勇魚と書く。鯨のことである。神武天皇の御歌に「いさくはし鯨」とある、そのいさくはしと云ふのは勇むと同じ意味である。いさなとりとは即ち鯨取りの意味で、約すれば漁師のことを云ふのである。漁師は海に出るものであるから海といふことの枕辭になつたのである。○濱藻は海岸に近く生えてゐる藻である。○寄るときどきを……はその濱藻の時々岸に流れ寄る如くの意。

一首の意は、末永くあなたも私を忘れずに時々逢はせて下さい。あの濱に生えてゐる藻が浪に漂ひ乍ら時々岸近くに流れ寄るやうに、末永くいつまでも……。

此の時々遇ふやうにと願ふ心を述べられたのは、矢張り例の皇后(姫の姉)に對する遠慮があるからである。日も夜も缺かさず天皇の御側に侍り度いのは山々である

のに、それを強いて抑へて、たゞ時々の御幸を願へば足ると云ふのは如何にも可憐らしい心である。天皇は此の歌を聞いて衣通郎姫に云ふには、決して此の歌を皇后に聞かしてはならない。皇后が聞いたならば必ずまた怒るに相違無いから……と云つて堅く秘密を守らせたといふことである。之れより以後世人は濱藻のことを「なのりそ」と云ひならはしたと云ふことだ。「なのりそ」は「勿レ告藻」である。

○

天皇崩御せられたる後、皇太子木梨輕皇子未だ位に即き給はず、皇子たましくその妹、輕大郎女を戀ひし、戀ひきはまりて術なし。殆ど死に至らむとす。爰に思ほさく、徒らに死なんよりは、罪なりといへども逢ふに如かずと遂に竊かに姦したまうて歌ひたまへる歌

足引の山田をつくり、山高み下樋を走せ。下問ひにわが訪ふ妹を、下泣きにわが泣く妻を 今日こそは安く肌觸れ。(古事記)

阿志比紀能、夜麻陀袁豆久理、夜麻陀加美、斯多備袁和志勢、志多杼比爾、

和賀登布伊毛袁、斯多那岐爾、和賀那久都麻袁、許布許曾婆、夜須久波陀布禮、

○足引は山の枕詞、山は脚を裾長く引きて聳えてゐるからである。○山田をつくり……は山に田を墾いたのである。○山高み下樋を走せ……はその開いた田は山上であるから、場所が高くて、水がよく懸らないから、そこへ水を注ぐ爲めに地の下を通して樋を引いたのである。走せ……は走らせと同じで、つまり樋を通はせたのである。こゝまでは次ぎの下問ひを云はうとしての序詞である。○下問ひ……は下心に忍びて密かに言ひ寄る意。○下泣きにわが泣く妻を……前句と重ねて、下心に密かに戀ひ悲しむ妻をとの意を述べたのである。今日こそは安く肌觸れ……は心も安らかに肌觸れたとの意。

一篇の意は、山上に田を作つて、その田の高い處に水を懸ける爲めに地の下に樋を引き通はす如く、自分も人知れず下心に問ひ寄り、下心に戀ひ悲しんだその妻(輕

皇子の妹をさす)に今日こそ安らかに肌觸れた……と今迄の悲しく忍びに忍んで來た心持を歌つて、今日の首尾を喜ばれたのである。

○ 皇太子輕皇子また歌ひたまへる歌

笹葉に打つや霰の、たしだしに寝ねてむ後は、人議ゆとも、うるはしとさ
寝しさ寝てば、刈薦のみだればみだれ、さ寝しさ寝てば。(古事記)

依佐能波爾、宇都夜阿良禮能、多志陀志爾、韋泥豆牟能知波、比登波加由

登母、宇流波斯登、佐泥斯佐泥豆婆、加理許母能、美陀禮婆美陀禮、佐泥

斯佐泥豆婆、

○笹葉に打つや霰の……笹の葉を打つ霰の如くの意、○たしだしに……は其の霰の音のさやかにたしかなる如く、たしはたしかにくの意、○寝ねてむ後は……妹と寝てしまつた後は、○人議ゆとも……は人が如何に自分の罪(兄妹相姦な

れば、その罪を云ふのである)を喧しく議らうとも、つまり世評はどんなにこちたくあらうとも、意、議ゆのゆ文字はるの轉じたのである。○うるはしとさ寝しさ寝てば……は愛し戀しと斯やうに二人相寝てしまつた以上は、○刈薦のみだればみだれ……刈薦はみだれの枕詞である。刈り籬いた薦草は亂れ易きものであるから云つたのである。(枕詞は多くの場合次ぎの名詞、もしくは動詞を形容する意味を持つてゐる、それが凡て古代人の直覺から發して「ぬば玉の夜」と云ひ、「久方の空」と云つたので、一つと雖も空な措辭では無い、今の短歌に枕詞を排斥する人が、少しもその點を知らずして罵つてゐるのは短見も甚しい。)みだればみだれ……は輕太子が自棄の言葉である。もう斯うなつたからには、後はどんなにでも……亂ればみだれよと投げやりの心を述べたのである。○さ寝しさ寝てば……今一度くり返されたのだ。

一篇の意は、笹の葉を打つ霰の音のやうに、自分はもうたしかにたしかに輕大郎